

第一篇 社会主義の経済的正義

第三章

土地、生産機関の公有化を正義と権利の名において主張する社会主義は、社会の目的に適合する利益でなければならない。だから、本編に題された社会主義の経済的正義というのは、社会主義の実現による経済的な幸福というのと同じ意味であると解釈されるべきである。正義に反するものは利益ではなく、利益をもたらさないもの正義ではない。社会主義が正義によって土地、生産機関の公有化を主張するのは、社会の利益のために公共的な経営をすることで、社会全体の経済的な幸福を増進させることを意味するのである。経済的戦国時代は経済的封建制度に至り、経済的封建制度はさらに経済的公民国家に至る。労働組織という徴兵に類するものが出現するのは、これを示す証拠である。

3—1 社会主義の労働方式

もちろん現在の生産でも、ある程度軍隊のような労働組織を持っていることは事実である。つまり、産業革命の当初のように各人が全く孤立した生産をしていないのと同じく、機械は集合して労働することによって稼働されるべきものであるため、そうした機械を使う間に労働組織がその秩序と一致するようになったからである。しかしながら、戦国時代という貴族国時代における軍隊と、今日の公民国家の軍隊は根本的に二つの重大な相違がある。——つまり第一点は、貴族国時代の武士は、その君主と主従的契約関係を結んで戦闘に従事していたのに対し、今日の公民国家の軍隊は、全国民各自の義務または権利として徴兵された組織であるという違いである。第二点は、戦国時代の戦闘の目的は、君主に帰属すべき利益のためだけにあり、武士と人民は君主が目的を果たすための手段であったのに対し、今日の公民国家の戦闘は、国家の目的と利益のためになされるという違いである。今の経済的貴族に人々が率いられて戦っているこの経済的戦国時代において、資本家とその従属者の関係は、かつての封建制度のように、完全に賃金、年俸などの契約関係によって成立している。そして奴隸的服従を強いる道徳により、経済的貴族の富を作るためだけに戦われる。かつての貴族らには奴隸的に服属する家臣を気ままに追い出し、怒りにまかせて思うように惨殺する権利があったように、今日の経済的貴族も忠勤の日が浅い学者や事務員を自由に解雇し、自己の利益のためには数万の労働者を餓死させる権利が認識される。かつての貴族らが領土拡張の利益と他者を凌駕する権力のために万骨¹を枯らしても構わないとする道徳上の権利を持っていたように、今日の経済的貴族も貪欲と蓄財のた

¹ 「万骨を枯らせる」とは、犠牲を省みないこと。

めに数千の労働者の手足を機械の刃にかけて切断し、設備が不完全な坑道に入らせて労働者を殺戮しても、道徳上の責任を負わないのである。そして戦国時代の当時、数多くの貴族が各地に割拠し、互いに攻め合う戦争で他の国土、人民の生活を荒らしたように、今日の経済的群雄たちも、各業種に割拠し、互いに他の生産と労働者を経済的乱戦にかけて焼き払っている。我々は、これ以上社会主義の軍隊のような労働と今日の公民国家の軍隊と比較することをやめなければならない。なぜならば、それはまた根本的に二つの重要な相違があるからである。——つまり第一点は、今日の公民国家の軍隊は、外国の利益と権利を排斥するため、少なくともそれに対抗するために徴集、訓練されるのだが、社会主義の軍隊のような労働は、全世界と相互扶助をするために生産に従事するという違いである。第二点は、次のような違いである。今日の公民国家の軍隊は、絶対的な専制権力を持つ指揮官と無限の奴隷的服従をする一般兵卒という階級によって組織されており、報酬などはかつての主従関係のように差がある。しかし、社会主義の軍隊のような労働においては、各人の自由と独立は十分に保障されている。また、権力的、命令的な組織を全く排斥して公共的義務に基づく道徳的活動と他の多くの奨励された動機によって労働し、物質的報酬に至ってはどんなに職務に軽重があっても、全く同一の額なのである。つまり要約すれば、社会主義の軍隊的労働組織では、徴集の手続によって招集された若者から中年の者に至るまでの国民が、自己の天性に基づいた職業の選択、自由、独立を基礎として、秩序立った大合同を形成する生産方法であると言えるのである。

これはまさしく経済史の大々的な革命である。しかしながら、国司、土豪の時代から群雄割拠の時代に入り、その後の封建制度を経て、公民国家の権利義務である国民的軍隊組織を持つに至った政治史の流れを見たならば、次のようなことが言えるだろう。経済的土豪が発達しつつも、併呑されるという戦国時代の浮き沈みを経験し、トラストという経済的封建制度へと至った経済史の潮流だけが維新革命の断崖を回避し、経済的公民国家の国民的労働軍を持つに至らないという道理があるろうかと。ただし、現状に甘んじるという人類の最も卑しむべき弱点のせいで、かつて封建制度を人類の社会組織の最終段階だとして今日の公民国家を望まなかった者がいたように、この経済的封建制度の下に恐れをなして²、むやみに潮流に従って溺れている者は、この「徴兵的労働組織」と言っている社会主義の理想に対し、恥知らずも甚だしい冷笑を浴びせる。彼らは、

「人は利己心を奨励しなくては、怠けてしまうのではないか。」

「人は肉体労働を嫌うのではないか。」

「果たして職業選択の自由はあるのか。」

「各人の自由、独立はどうやって保障できるのか。」

「官僚専制の時代を現実化させるのではないか。」

「もともと不平等な人間に平等な分配をすることは、不当ではないか。」

² 原文では「兢兢惶々」となっている。兢兢も惶も「恐れる」という意味なので、本文のように訳した。

「生産を減退させ、社会全体を著しい貧困に陥れるのではないか。」
などなどと言って批判するのである。批判はあれこれ入り交じって限りがない。

我々は次のことを明らかにしよう。社会主義はこれら全ての高貴な要求を全うするために唱えられている³と。社会主義でありながら、もしこれら高貴なものうち、一つでも欠けているならば、その最終目標である社会の進化と言うようなものも空想にとどまってしまい、まさしく傷の入ったダイヤモンドにすぎないだろう。しかしながら、我々は切実に希望している。このような無数の質問を社会主義の提案に対して発する者が、質問を発する前にまず少し心を落ち着けて考え、発しようとするのと同じ質問を現代社会に提出することを。——現代社会は人の利己心を奨励する動機をくじき、社会全体を怠けさせているのではないか。——現代社会は人々に肉体労働を嫌がらせるに至っているのではないか。——現代社会において職業の選択は自由なのか。——現代社会において個人の独立は果たして保障されているのか。——現代社会はひどい官僚専制ではないのか。——現代社会は果たしてもととの不平等に対応した正当な分配をしているのか。——現代社会は経済的戦争あるいは厳しい取り立てによって生産を破壊し、社会全体を著しい貧困に陥れているのではないのか。

おそらく彼らは言うだろう。それならば、先に解決すべき問題がある——つまり、進化論は誤りであって、人類の歴史は経済的貴族国の段階でとどまり、地球が冷却する⁴まで全く変わらないのかということであると。

3—2 社会主義を批判する論者の代表者の指定

我々は社会主義の詳細な説明をするため、以上のような無数の非難に対して答えるため、ここに代表的学者を指定しておく。それは、講壇社会主義⁵あるいは国家主義を主張すると称する立場に立つ者である。第一には、講壇社会主義あるいは国家社会主義というものの真相を暴露し、彼らの欺瞞から社会主義を保護しなければならないという必要があるからである。純正社会主義は、絶対にこのような欺瞞によって汚されてはならない。彼らの立場は大学の講壇で唱えられるため、講壇社会主義と呼ばれ、政府によって取られたため、国家社会主義と称されるのだが、こうしたものはまさしく社会主義の傾向さえもないものである。国家とは政府のことではない。講壇の神聖は資本家階級の不正によって踏みにじられてはいけないことはもちろんである。けれど、どの政府も権力階級に都合のよいことは国家の名において行い、資本家階級が事実上知識階級を使用するため、神聖であるべき大学の講壇と倫理的制度である国家は、今やむしろ真理を曲げて悪く言い、国家の権利を

³ 文意がわかりにくい、「社会主義はそうした懸念に対して無頓着なわけではない。そうした事態が発生することを避けようとしている点では変わりはない。」という意味だろう。

⁴ 「冷却する」というのは、必ずしも物質的な意味ではなく、「滅びる」ということを象徴的に述べたものだろう。

⁵ 「講壇社会主義」とは、「資本主義を変革せず、社会政策・社会立法などによって漸進的に社会改革を行おうとする理論」のことである。社会改良主義とも呼ばれる立場である。講壇社会主義という名称は、マルクス主義者が社会改良主義の立場を「実際に知らない学者が大学の講壇で唱えるお遊び」という皮肉を込めて呼んだものである。

無視する彼ら欺瞞者に盗み取られてしまっている。いや、彼らは少しも社会主義ではない。ただ、彼らは現在の経済的貴族国が厳粛な個人主義によって維持されるべきでないことを知っているから、資本家主義が社会主義の国旗を濫用し、退却する際の逃げ道を濁そうと図る国際法違反をしているにすぎない。我が日本などでは、今なお社会主義が幼稚な段階にとどまり、社会全体が未だ長々と眠っているため、資本家主義が絶対的な権限を振るっている時期にある。だから、我々は我が国における講壇社会主義者とか、国家社会主義者とか称している者たちが、社会主義の勢力に譲歩させられた結果生じた国際法違反の卑劣であるとは言わない⁶。しかしながら、単なる通訳のように、外国人の所説を翻訳して報告するにすぎない一般の大学教授らの理解力に乏しい頭脳には、穏健、折衷というようなものが適合するのである。また他方で、社会主義に対する不快感から免れることにおいて利益があると考えられるだろう。そして社会主義の国旗を濫用して、公平厳正であるかのような印象を与えるため、明確に真理を解していない社会主義者を疑惑の中でさまよわせ、自分たちが本来の社会主義の提唱者⁷であるかのような印象を与えるのである。特にそれは、世間一般の人が社会主義を陥れようとするのを助長する効果があるので、大変警戒すべきである。まさしく講壇社会主義というものは、神聖な大学の講壇から説かれるものではなく、汚された講壇が資本家の弁護に努める「資本家社会主義」と名付けられるべきものである。国家社会主義も実際には国家に帰属する権利の主張ではなく、権力階級の政府が自分たちの官僚に権力の維持を図らせる「政府社会主義」と称すべきである。純正社会主義はこのようなキツネやタヌキと同じ道を行くものではない。

国家社会主義が国家の本質、法理を理解していないことは、後の『いわゆる国体論の復古的革命主義』と『社会主義の啓蒙運動』において説く。ここでは、社会主義の経済的正義——つまり社会主義の経済的幸福を全く理解せず、国家社会主義を主張している代表的な学者を指定して論じようと思う。代表的学者と見られる者には、東京帝国大学においては法学博士金井延氏が、京都帝国大学においては法学博士田島錦治氏がいる。前者の『社会経済学』、後者の『最近経済論』によって我々はその大体を察することができる。しかしながら注意すべきことは、『最近経済論』は社会主義に対して浅からぬ同情を持っているのに対し、『社会経済学』は著しく非社会主義的な不快感が満ちあふれていることである⁸。もちろん前者においても、「社会党はもともと社会問題を解釈することの目的として設立されたけれど、今や社会党の存在自体が社会問題となっている。」というような無礼な言い回しがないわけではないが、『社会経済学』ほどではない。『社会経済学』は経済学の利益を数え、「悪意をもって殊更に刺激し、公安を害する恐れが甚だしい間違った説を正す効用があ

⁶ 文意が判然としないが、「講壇社会主義などについて、社会主義者からの批判を受けた資本主義者が小手先の譲歩策を示したものにすぎないなどとは言わない。」ということだろう。なぜなら、日本ではその批判勢力が微弱だから、資本主義者は譲歩する必要がなかったからである。

⁷ 原文では、「提契者」となっている。どういう意味かわかりかねるが、文脈から判断して「提唱」とさほど変わらないものと考え、「提唱者」という意味に解した。

⁸ 「非社会主義的な不快感が満ちあふれている」というのはわかりにくいだが、要するに「社会主義に対する敵意が満ちあふれている」ということだろう。

る。この学間に世間一般の暗い面を利用し、いや濫用してドイツその他において社会民主党並びにその垂流がしている憎むべき所行は、今なお我々の記憶に存在している。これを正すことは、ただ正確な経済学の攻究をすることによってのみ可能である。」との緒論で始まっている。まさしく全巻を通じて、社会主義に対する恐怖と憎悪の念を持って書かれているから、『最近経済学』は『社会経済学』の比ではない。しかしながら、『最近経済論』が社会主義に対して同情を失っていない穏健な態度をとる分、それだけ博士の誤解が読者にしっかりと受け止められるはずであり、『社会経済学』が不快感を刺激することを任務としていることと比較しても、世間に与える力の点で劣ってはいない。そして両者がともに十数版を重ねた堂々たる大著であることから、全国数万の法律、経済の公私大学生に、いかに経済学の概念と同時に社会主義に対する誤解と不快感をまいて、先入観を与えて折るか知らなければならない。我々は固く信じている。実際の運動によって社会党が勢力を占める場合には、国家社会主義が随行することはあるだろうが、純然たる資本家の経済学が維持できない今日において、真理の敵として経済的貴族主義の唯一の砦として学界に残るものは、まさしくこの国旗濫用の国際法違反であると。

3—3 金井延博士の議論への反論——社会主義は労働者主義ではない——

我々はまず金井博士の『社会経済学』が、いかに社会主義の根拠からして理解できないかを、以下の一節によって知ることができる。金井博士は次のように言う。

「社会主義の論者は、時折『資本の起源は元来労働にあるから、生産事業から生じる全ての利益は、皆労働者の報酬とするべきものである。』と説いている。しかし、これは大いに誤った説であるにすぎない。社会が未だ全く開けていない時代においては、論者のように、資本が生じるのは完全に労働によっていると言える。この点において労働が資本の起源であると断定することができるのかという所であるが、未開時代のいわゆる資本というものは生じるや否や直ちに消費されたものであって、未だ真の意味での資本とは言えないものであった。その段階から段々と進歩し、次第に今日のいわゆる資本というものが生じるに至ったのである。資本が増加する順序の概要はこのようなものである。さて、そうであるならば、資本が増加する時にその増加を支えているものは、単に労働だけではなく、資本そのものもまた大いにそれを支える力を持っているとすることができる。もしこの時に、資本が全くないならば、労働はただ孤立するだけで、何ら生産の役に立たないのである。とどのつまり、労働は資本と結合して初めて役に立つものであって、資本もまた労働を得ることで活発な生産活動ができるのである。これにより、それらはあたかも車の両輪のように互いに分離できない関係を持つ。この両者に自然を加えると、生産について真を得るのは、あたかも車の回転する両輪の他に走る場所、動力を必要とするのと同じである。もし資本の起源は労働であるとして、生産事業から生じる利益を全て労働者の報酬にすることができると言えるならば、同様の論拠によって、それを可能にしているのは資本であるとして、全ての利益は資本に帰属させなければならないと言える。しかし、資本が労力

を得ることで役に立っていると同時に、労力は資本があることで初めて役に立つことができるのであるから、つまるところ両者はそれにふさわしい報酬を得れば十分である。

未開時代においても、資本の起源は労働だけによるのではない。労力は資本の父であるべきものであるが、その母である自然がなければ、資本は決して生じ得ないものである。それならば、自然物を供給する土地の所有者もまた相当の報酬を受けなければならないというのが筋である。現在の経済社会における分配は、不公平であるにもかかわらず、社会主義の論者はよりいっそう不公平な分配をしようとするものである。その上、今日の社会における資本は、資本として労働を助けているものである。かつその多くは生産上の資本として活動しているものである。資本それ自身がまた新たな資本を生じさせる時代である。それならば、つまり資本家に対しても報酬を与えなければならないことは言うまでもないことであろう。社会主義の論者が誤っていることは以上のことから知るべきである。」

このような誤解は、少しも金井博士のみに限ったものではない。他に、多くの資本と労働の調和を図ると主張する論議と同じで、あの社会学の立場から講壇社会主義を説いている文学博士建部遯吾氏⁹などもその一人である。しかしながら社会主義の理論は、いかに深遠であって容易に研究できないものであるとしても、このように根本から理解していないようなものは、社会主義について無知であるとする他ない。金井博士はかつて労働問題に関わっていたことがあるため、世間の人は彼を社会主義者であるかのように考えるので、金井博士は大いに恐怖してしばしば弁解に尽くしているのだが、社会主義の根本から誤解する者が社会主義者でないことは、博士の弁解に有力な証明を与えるものである。我々は博士の社会主義に不快感を抱きつつも、敢えて「齒には齒を」という形で応酬する者ではないが、他の主義を非難したいと思うならば、少なくとも他の主義の文字を理解できるだけの能力が必要である。——こうした実に非礼な要求は、帝国大学教授である法学博士に不可欠な能力である。博士が社会主義の主張を理解する時、「社会主義の論者は、時折『資本の起源は元来労働にあるから、生産事業から生じる全ての利益は、皆労働者の報酬とすべきものである。』と主張する」として非難しているが、社会主義はこうしたことを要求しないのである。現在生存して労働している個人あるいは階級のみが先祖の肉体的、精神的労働の蓄積である資本から生じる生産物の全部を独り占めできるということは社会主義の要求しない所である。社会主義は、資本家階級が祖先の労働の蓄積である資本から生じる全ての生産物の略奪を否認するように、「現在の労働からして過去の労働に対する独り占めが労働者階級の権利である」などという主張は、是認しないのである。社会主義は階級の一掃を図ろうとしているのだ。資本家階級と労働者階級を対立させ、その上に資本と労働の調和と言うようなつなぎ合わせをしようとする者とは、論拠そのものから異なることを知らなければならない。資本と労働の調和を図る¹⁰というものは、現在の資本家、労働者

⁹ 明治一大正期の文学者、社会学者。東京大学で教鞭をとり、日本の社会学の先駆者になった。

¹⁰ 原文では「資本の労働調和」となっている。直前にある「資本労働の調和」と「の」の位置が違う。著作集ではこの点について何も指摘がないが、「資本の労働調和」では意味が不明である。「の」の位置を誤ったのではないかと思わ

の二つの階級を永久不滅の制度であると認識し、そのいずれかの階級が歴史と社会の生産物をより多く略奪すべきかを論争するものである。社会主義は、この二つの階級を絶滅させ、歴史的に累積してきた知識と社会的労働で得た生産物に対して「社会」が所有権を持つと言うものである。だから、社会主義が実現されて、略奪される階級、独り占めする階級が消滅した時には、敢えて資本と労働の調和などという名の下に、社会の生産物を各階級が略奪、独り占めすることはなくなる。そして一切の生産物を所有する社会に対して、生き残った資本家も、地主の子供も、かよわい婦女も、幼児も、また働けない障害者、病人¹¹も当然分配を要求することができるのである。我々が先に、機械は祖先の靈魂が宿り、子孫の愛情を受けるために稼働するものであると言ったのは、この意味においてである。それならば、今日のように資本家階級だけが祖先の偏った寵愛を思いのままに受けることができないのと同じく、働くことのできる体の丈夫な者だけが自己の労働以外に属する祖先の靈魂の労働分までも独り占めして、体や心が劣った不幸な祖先の愛児を排斥できるのではない。社会規模の生産をする時代の生産物は、個人規模の労働をする時代の分配の基準¹²で計ってはいけない。そうではないのだ！ 資本家階級に帰属すべき利益のために主張されるものが資本家主義と称されるのであれば、金井博士及び一般の資本と労働の調和論者の理解する社会主義というものは、労働者階級のみを最終目標とするかのように考えるため、労働者主義と名付けられるべきものである。もちろん、社会主義は当面の救済として、また運動の本隊として今の労働者階級に陣営を置くものであるが、これがあるからと言って労働者階級を維持するものと理解してはいけない。階級のない平等な社会にしようとするだけである。社会主義は、最終目標として利益の帰属する主体を社会と考えるため、その名がある。現在の階級的対立を維持し、略奪階級の地位を維持しようと考えようようなものは決して社会主義ではない。

3—4 資本と資本家を混同する無知

金井博士は文字を理解する能力が欠乏しているため、階級の絶滅に努力する社会主義を、逆に労働者階級を維持し、略奪階級の地位を逆転させようと企てているものであるかの如くように解釈する。そしてそれとともに、資本と資本家を全く混同してしまっている。彼は言う。「資本それ自身がまた新たな資本を生じさせる時代である。それならば、つまり資本家に対しても報酬を与えなければならないことは言うまでもないことであろう。」と。このような最も重大な点における思想の混乱は、千ページにわたる『社会経済学』の大著を全く無駄なものをつなぎ合わせただけにとどまらせている。金井博士は試しに自ら¹³を省みる必要がある。私金井という者は経済学者なのだろうか、それとも経済学なのだろうか。

れる。よって、本文では「資本労働の調和」と解して訳した。

11 原文では「廢疾」となっているので、ここでの「病人」とは「不治の病に冒された者」のことを指す。

12 原文では「分配的眼光」となっているが、意識した。

13 原文では「親ら」となっている。「親」という字には、「自らすること」という意味があるので、「みずから」と読ませるのである。よってその読みを前提に訳した。

もし金井延という者が経済学であると言うならば、経済学が談話し、経済学が散歩し、経済学が最敬礼をして、天皇陛下万歳を叫ぶというようなことになるが、経済学に活動能力があるとは考えられないことではないのか¹⁴。経済学者と経済学を混同することがこのようではないならば、どうして資本の効用から直ちに資本家の略奪に話を直ちに転じて、資本家に略奪の権利を付するのであろうか。社会主義は資本家が無用だと言うだけで、決して資本が無用だと口にしたことはない。地主は無用だと言うだけで、自然は無用だと主張したことはない。労働者の解放と言うだけで、働かずに生きられると言ったことはないのである。資本は無用と言いながら、その無用な資本の公有化のために身を捨てて努力するなどという矛盾は、人類としてはあり得ないことであって、社会主義ではない。地主がある以前に自然がある。地主が減びようとも、自然は生産の源泉として存在する。社会主義はこの地球を去って、他の惑星に移住せよなどとは言わないのである。

こうした知能のないような文字の使い方をするのは、とどのつまり博士が社会主義について何も理解していないからである。社会主義が革命主義であるのは、その経済学の歴史的研究において資本家による略奪の跡を知り、そして現在略奪している経済的貴族国というものを発見したからなのである。「資本は略奪の蓄積である」。この一言はまさしく社会主義が革命の旗印を翻す城郭であって、もし社会主義に一矢報いようとするならば、必ずこの言葉が的であればならない。それなのに、博士のいわゆる資本の説明というものを見よ。彼は言う。「未開時代¹⁵のいわゆる資本というものは生じるや否や直ちに消費されたものであって、未だ真の意味での資本とは言えないものであった。その段階から段々と進歩し、次第に今日のいわゆる資本というものが生じるに至ったのである。資本が増加する順序の概要はこのようなものである。」と。しかしながら、千ページにわたる大著としては、これはあまりにも「概要」であった。そして社会主義が厳粛な権利論によって立つのに対し、博士の権利論は古来存在した無数の権利思想を刺殺し合うもの同士を羅列し、平然としているのには驚く他ない。「一個人の財産所有権は、人類が占有と労働によって外界の財産、特に貨物に捺印するという人類としての性格にその起源を持ち、社会国家が法制度においてこれの性格を承認したことによって完備するものである。」と。これは、フランス革命を起こした占有説と労働説が、平坦な頭脳の上に権利を争わずに存在している状況であって、あまりにも完全に行きすぎた調和であった（資本と労働については、『社会主義の啓蒙運動』を見よ）。

3—5 田島錦治博士の議論への反論——利己心のみで人間を語ることは、人の性質

¹⁴ 原文では、「若し金井延なる者が経済学なりと云はば経済学が談話し、経済学が散歩し、経済学が最敬礼を為し天皇陛下万歳を叫ぶ如き活動能力は思考し得べからざること非らずや。」となっている。だが、原文通りに訳すと意味がとりにくいので、大幅に言葉を補って訳した。

¹⁵ 原文では「当時」なので、このような意味があると確定することはできない。しかし、これは以前に引用した箇所をそのまま引っ張ってきているものなので、訳が食い違っていると座りが悪い。そのため、以前の引用箇所と同じ訳にそろえてある。そのため、「当時」となっているところを「未開時代」としているのである。

を理解しない議論である——

田島博士の『最近経済論』は、その巻末でカール・マルクスの学説のあらましを解説していることなどを見ても、金井博士のように社会主義を労働者主義と解し、資本と資本家、土地と地主を混同するような醜態をさらしていないことは言うまでもない。しかしながら博士もまた国家社会主義であることにおいて、国家社会主義が陥っている浅見の多くを免れることができない。人の性質から社会主義を排した者は次のように言う。

「極端な社会主義の学者が希望する所は、経済活動の原動力の一つである利己心を道徳心に変換させ、そして自分たちの創造した国家、つまり社会的国家において人民に各々の全力を注いで労働に従事させ、その報酬は労働に応じて公平に分配しようとする点にある。しかしこの学説は、未だ人間の本性の全体を明らかにしたものではない。したがって、実行を見ることが極めて困難であろうということは、言うまでもないことである。」

金井博士の『社会経済学』にも、

「生産の必需品である土地資本を社会の共有物とし、生産物の分配を専ら各人の労働にだけ依拠させることもまた過去における文明の進歩状態に矛盾するものである。ひとたび利己心を全く排斥し、公共心だけに依拠するならば、経済上の進歩は全く止まってしまうであろう。そして経済上においてもまた一般の社会上におけるのと同じく、休止の状態は後退と同じ結果になるであろうから、共産制度によって組織された社会は、遠からずとうとういかんともし難い困窮に陥るか、あるいは人類の歴史上類を見ない専制が行われる社会となるに至るであろう。」とある。

我々は単に『最近経済論』と『社会経済学』だけでなく、無数に出版されている新派経済学という学派の著書においても、まさしく旧派経済学の誤謬である人の性質に関する見解への論駁を書き出しの第一章に見るのである。もちろん、旧派経済学のように人間を単なる「お金だけを欲しがらる動物」と仮定するようなことは、今さら彼ら新派経済学の尊い駁論を待たずとも、既に遠い昔に社会主義者と人間の霊能¹⁶を直覚する文学者（例えばカーライルのような）によって打破しつくされているのである。人間を「お金だけで動く動物である」と仮定しては、他の文学、歴史、芸術、科学などに対する人間の盛んな活動を説明できないことはもちろん、経済学それ自身の対象とする経済的現象をも解釈できないことは言うまでもないことである。お金のみを欲しがらる利己的動物ならば、慈善によってお金をもらうこと、寄付金によるお金の流通、名誉、恋愛、権勢、その他の政治的活動などによって生じる流通、交換という経済的現象が一切説明できないのである。我々は新派経済学がこの偏見を脱却し、人類には他の公共心、つまり社会性が本能的に存在することを認識し、公共心による経済的活動を研究の対象に入れることを褒め称えるものである。——それなのに今なお、人類の利己心を説明するのに、お金によってのみ満足できるものと断定して推論を進めてしまうのであるから、人の性質を理解しない点において、旧派経済

¹⁶ この「霊能」という語は「精神」と同じ意味であろうか？ 確定しかねるので、そのままにした。

学とまさしく五十歩百歩であることを示す好例である。

いや、新派経済学は公共心による経済的活動を理解しない点において、旧派経済学をさほど凌駕していない。社会主義は実に人類が盛んな公共心によって生産に従事するようになることを期待するものである。中国の傭兵よりも日本の徴兵のほうがはるかに公共心を持って活動していることを知るならば、今日の傭兵的労働者よりも社会主義の徴兵的労働軍のほうがいかに激しい公共心によって経済的活動に従事し、生産上の効果を挙げるかは日清戦争で両軍の勢いがかけ離れていた事実¹⁷によっても想像できるだろう。人類が一私人の命令によって死ぬ者でないことを知るならば、今日の傭兵的労働者が貪欲な資本家の利益のために全力を注いで働かないのは当然のことである。傭兵的労働者が無数の監督者がいるのにもかかわらず、それでも怠ける隙を得ようとうかがっている事実は、あたかも中国の傭兵が背後に指揮官の軍刀があるにもかかわらず、散り散りバラバラになって退却した事実と同じ理由からである。社会主義の徴兵的労働隊を無数の官僚による監督を必要とするものと速断し、人類の歴史上類を見ないほどのひどい専制が行われる社会となるだろうと言っている金井博士などは、維新革命後に封建諸侯による軍役が廃止されて徴兵組織が採用された当時、西南戦争において実物教育がなされるまで、徴兵の武士に及ばないだろうと憂慮していたことと同じ浅見である。公共心が一切を排除して進む時、何の監督を必要としようか。一大隊の指揮者が全て戦死したにもかかわらず、それでも戦争を継続したというような事実は、専制のひどい軍隊においてさえ珍しいことではない。生存の欲望のある生物として人が最も避けようとする死においてさえ、公共心の動機は他の全ての動機に打ち勝って働くとするならば、平和、快樂、社会のためにする労働であることを明らかに意識して服する一日四、五時間のわずかな肉体活動に際し、人の利己心が公共心を押さえつけると考えるようなことは赤子の推理力にも劣っている（ここではしばらく利己心と公共心を浅見な者の使用するままに用いる。なお、『生物進化論と社会哲学』を見よ）。——いや、四、五時間の労働は、生物として生理的に要求されるものである。有機体は有機的活動を必要とする。学者が散歩もせず一日中本を読むことだけにふけることができないうように、学生が体操もせず、また長時間の遊戯もしなければ、英語、数学の習得に耐えられないように、赤ん坊がゆりかごの中にいて、絶えず自動機械のように手足を動かしているように、いかに精神的事務に従事するものと言っても、人類は有機体として苦痛がなく、飽きない程度の労働はむしろ当然の生理的要求なのである。今日牢獄に禁錮刑で収容されている者が何もしないことに耐えられず、自ら進んで刑務作業¹⁸を願い出るのが通常であることなどはまさしくこのためである（だからベラミー¹⁹は、『ルッキング・バックワード顧みれば』の中で、特別な怠け者をこの生理的要求の束縛下に置き、何もしないことによる苦痛を味わわせる

17 日清戦争では、日本の兵隊に比べて清の兵隊は士気が低かったと言われている。

18 「刑務作業」とは、懲役刑を受けた受刑者に強制的に課せられる労働のこと。

19 十九世紀のアメリカの作家。『顧みれば』で、紀元二〇〇〇年のアメリカを社会主義的ユートピアとして描いた。社会変革に取り組み、後の社会運動、労働運動に影響を与えた。

ために、巧みな口ぶりでその者に一人暮らしをさせる制度を語っている)。——しかしながら、有機体は有機的活動を必要とするとともに、また有機的休息を必要とする。我々は、今日の賃金奴隷が怠けやすい事実を見て人の本性は怠惰にあるかのように考える浅見な学者に、彼らが怠けなければならない理由をわかりやすいようにするため、こう想像することを求める。つまり、今の経済学者が七歳の時から白髪の老齢期を経て墓場に至るまでを、一日十二、三時間、一年で三百六十日休みもなく、安らかな日もなく、希望も変化も興味もない状態——例えばフォーセット²⁰の経済学の小冊子を繰り返し繰り返し読み、無限に繰り返し読んで一生を送るという単調な運命——だと捉えられるものとしてみよ。それでも学者は、経済学を研究することを投げ出したいとも思わず、または怠惰は人の本性であると言う信念を維持できるだろうか。こうした仮設²¹の問いは、ほとんど常識のない者でなければ発することのできないようなものである。しかも、このような常識を欠いたことを使って、法学博士である大学教授が社会主義を非難する議論を作っているとしたら、どうであろうか。労働者はこのような常識のない仮設を事実において味わっているのである。早朝から日没まで、耳を破るような機械の運転のそばで、鉄板作りを反復するだけにすぎない労働がある。夏の日の焼くような日中でも、休息时间なしに石炭を火に投げ入れるだけの労働がある。そして全ての階級を通じて、労働者はこうした変化のない一日を繰り返し、そのために単調な一生を終るのである。労働者は有機体以下の石ではないし、有機体以上の神でもない。有機体として学者が有機的活動の散歩を望むように、有機体として労働者には有機的休息が要求される。それなのに、それを怠惰と名付けられるのは、労働者を無機物の機械と考えるためである。それだけでなく、怠惰それ自身も今日の社会組織においては当然のものである。人は苦痛を動機として動くのではない。眼前の苦痛を我慢したり、物質的な苦痛を甘受したりするのは、将来の快樂もしくは精神的快樂が苦痛に打ち勝って働くからである。今日の賃金奴隷のように、意味もなく他人に帰属する利益のために生産し、自己の眼前に暗黒以外に何もない境遇につながれた者が、眼前の苦痛を回避するために怠惰に走るのは明白なことではないか。また社会主義の時代におけるように、その労働によって社会の幸福が増進されることを明らかに意識するならば、たとえ特別の事情によって労働時間の多くの場面で肉体的苦痛が少なくないとしても、精神的快樂という動機は利己心を圧迫して働くであろう。そういうことならば、労働が軽蔑すべき奴隷の職である今日においては、精神的快樂という動機は皆無である（なお、『社会主義の倫理的理想』を見よ）。

3—6 労働を神聖なものにするための条件

労働という言葉の中には軽蔑の意味が伴う。なぜならば、それが奴隷の職だからである。奴隷は軽蔑され、自由民は尊敬される。今日世間の多くの人々に神聖であるとされる軍務

²⁰ 誰なのかわからない。イギリスの経済学者ヘンリー・フォーセットのことか？

²¹ 「仮設」とは、「実際にはないものをあつとすること」の意味。

に服することも、それが奴隷の職であった間はひどく軽蔑されていたことなどはその例である。元来、神聖と言ったり、卑しいと言ったりすることなどは、その時代における社会組織の状態によるのであり、職業そのものとは全く関係ないことである。だから我々は、一般の社会主義者のように、「戦争は罪悪であって、労働は神聖である」と主張して満足するものではない。理想であるならば、それも可能である。今日、労働は決して神聖ではない。軽蔑すべき奴隷の職であって、神聖なものは黄金ただ一つだけである。黄金ならば盗賊のものでも、賄賂のものでも、詐欺師のものでも、売春婦のものでも、理由を問わず価値に上下がない。神聖とは、このようなそれ自体が価値を持ち、外部の条件によって妨げられない絶対的なものにだけ名付けられるべきものである。例えば絶対無限の権利を持っていた時代の君主を神聖と称したようなものである。今日の労働などは、いかなる労働であるのかという相対的な条件によって等級をつけられ、決して神聖なものではない。今日の労働が肉体的、精神的という相対的条件によって、尊敬されもすれば軽蔑されもするということは、明らかに労働が絶対的なものである神聖なものではないことの証であって、その軽蔑される肉体的労働は奴隷が軽蔑すべき存在だからである。奴隷は軽蔑され、自由民は尊敬される。だから今日、精神的労働が万人に希望され、肉体的労働が嫌われるのは、労働の難易によるのではなく、尊卑によるのでもなく、奴隷的屈従を強いられるよりも尊敬される自由民でありたいと願う権利思想の要求からである。——権利の前には何人も頭を下げなければならない、それが労働の神聖であっても。——このためにこそ、階級打破の社会主義があるのだ。精神的労働は略奪階級がその略奪によって育てた花であるために略奪階級の背景に輝き、肉体的労働は奴隷階級²²が屈従者であることを表す労働であるために軽蔑される。それを理解するならば、奴隷の階級と自由民の階級をなくし、言い換えれば社会全体の構成員を全て平等な権利と義務によって愛し合う自由民とし、自由民である権利として、義務として働くようになれば、労働は外部からの相対的条件によって等級をつけられることもなく、労働することそれ自体が絶対的なものとして神聖になるだろう。それなのに、階級を打破しようとする社会主義に対し、「人は労働を嫌がるだろう。」「怠惰によって官僚専制に至るだろう」などと言って非難するとはどういうことなのか。国家社会主義こそ資本家階級という略奪者と労働者階級という奴隷を維持する者であって、だからこそ労働は神聖ではないのだ。——人を怠惰にして労働を嫌がらせるのは、むしろ国家社会主義そのものではないのか。軍人の職が軽蔑から栄光ある職になったように、労働を屈従しなければならない嫌なものから階級のない神聖なものに変化させよ。軍人の栄光に代わる労働の神聖は、軍人が戦場において表すような公共心によって生産活動をさせるだろう。

3—7 利己心の転換に関する田島博士の誤解

²² 原文では「屈従階級」となっている。屈従階級ではやや意味が通じにくいと思われるので、訳語は別の表現に改めた。

しかしながら、田島博士が誤解しているように、社会主義は今日直ちに経済活動の「原動力の一つである利己心を道徳心に変換させよう」と主張するものではない。我々は、「今日直ちに」という前置きを置く。どうしてかと言えば、今日の盛んな利己心は人類が私有財産制度に入ってから盛んなものにされた本能であって、社会主義が実現してから三、四世代ほど経てば、共産制度に適合する道徳心が本能化するであろうことは、社会進化の理想として我々が十分信じられる根拠があるからである（『生物進化論と社会哲学』の道徳の本能化を論じた所を見よ）。とにかく、社会進化がこうした段階に到達するまでは、利己心が公共心と相並んで社会的活動の二本柱となることは疑いもない事実である。だから、社会主義は経済活動における利己心という動機を無視するものではない。しかしながら、利己心という動機を無視しないと言うことは、利己心がお金によって満足するということではない。我々が先に、新派経済学の人の本性に対する見解は旧派経済学の見解と五十歩百歩であると言ったのは、このことによるのである。彼らがなすべきことは、経済学の貝殻から頭を出して、まず「お金」の中に含まれる元素を分析することである。お金の本体である黄金が輝きを放つ物質であるために珍重されることはその本来の意義であって、野蛮人はこの意味で黄金を使用する。それなのに、黄金がお金として用いられる時においては、単に輝きを放つ物質という意味ではなく、また単に他の物質の代表という意味でもない。黄金が代表するものはまさしく人生そのものの価値である。黄金ひとかけらの中には、安らかな生活の祈願、病気の回復の祈願、家庭の快樂の祈願、子供の教育の祈願、老後の休養の祈願、男子の威厳、貞操の神聖、良心の独立、政治の自由、公共の活動、知識、品性、権力、名誉の源泉など実に一切の人の意義がこもっているのである。それなのに、社会主義が実現されて、人生の価格が黄金によって評価されなくなっても、なお黄金が人の本性と同じメートルを保つ²³と考えるならば、それは哀れむべき思考力である。社会は権力組織ではないから、黄金で買える権力はない。政治という名において黄金の略奪がなされるのが常になる世でなければ、政治業者となるために必要な黄金はなくなり、また黄金によって有権者を買える政治業者²⁴もいなくなる。公共的な活動をしようとする場合、今日のように一私人が一生懸命努力する必要はなく、公共機関が公共の財産によって活動するだろう。個人に賄賂として贈る財産やその必要性がないのと同時に、賄賂に値する権力を持ち、専制と奴隷の誘惑にかられる官僚組織もない。個人は国家の物質的保護によって、何人も良心の独立を曲げる必要はなく、道徳の履行は経済上の脅迫と誘惑がなくとも本能的に行われるだろう。明哲な学者や熱心な政治家が、無知で美しく着飾った豚のような資本家の前に土下座するという醜態もなく、大人たち²⁵の動物的な欲求によって、まだあどけない少女

²³ 「メートルを保つ」というのはよくわからない表現だが、「距離を保つ」という意味だとすれば、「同じ役割を変えず果たす」という意味となるだろう。

²⁴ 原文では「黄金によりて購買し得べき政治業者」となっており、何をかうのか明らかでないため、意味を補足した。

²⁵ 原文では「老獍」となっているが、意味がよくわからない。文脈から考えて訳語をあてた。

をもてあそばせる²⁶という残忍さもなくなるだろう。子供の養育費は公共の費用から支払わせ、教育は社会の役割となる。病気を患えば、公共の病院と医師を選ぶ自由があり、老いた時には年金の支給がある。平等な分配をするために、家庭は経済的従属関係から生じる専制と屈従をなくし、清らかな父母の恋愛と親子の慈悲のみによって結びつき、今日存在する生存の不安などは夢にも見なくなるだろう。今日黄金の中にこめられているこれら全ての要素を取り除き、残っているものを考えよ。お金は全く本来の輝きを放つ物質にすぎないのではないか。そしてまた、他の社会主義者による提案のように、手形が紙幣を代表し、さらに黄金が品物を代表すると言うような重複はしない。品物そのものを直接代表する紙切れを貨幣とするとしても、人生の十分な満足は大いに拡張された公共財産によって足るとするから、その紙切れが今日の貨幣のように人生そのものの価値を持ち、奪い合いの対象となるようなことは想像できるものではない。いわゆる経済学者という者がなすべきことは自らを顧みることである。人がお金を欲しがるのはお金そのものであるのか。お金の輝きを放つ性質であるのか。お金の与える快楽であるのか。お金によって買える一般の快楽であるのか。快楽を受ける自我であるのか。自我の実現にあるのか。いっそう高い自我に到達しようとする他の目的の手段にあるのか。——ケチと装飾は、お金が要求される理由の一つをなすものである。衣食の満足もまさしく他の理由の一つである。しかもそれに満足してからもお金が無限に要求されているのは、まさしく名誉と地位に対する購買力があるからである。そしてこうした重大な購買力が単なる鉱物一個にあるのは、名誉と地位がお金によって築かれる社会組織であるという理由からだけである。社会主義がこうした社会組織を革命によって打倒した後においては、名誉と地位に対する利己心は、お金による仲介によらなくとも、名誉そのもの、地位そのものに対する利己心の活動となり、活発に生産しようという動機を刺激するだろう。新派経済学者で少しでも頭を働かせるならば、経済的競争がなくなるとともに、あの武士がなお経済的階級があるにもかかわらず、利己心の満足を他の名誉や文武の道に求め、黄金を扇に載せて触ることさえ汚らわしいこととしていた事実を認めるのではないか。社会主義の徴兵的労働組織は大いに公共心の盛んな活動を期待するとともに、社会が一定の進化に達するまでは、名誉と地位に対する利己心の競争によって生産活動を刺激する奨励的設備が必要であると信じるのである。

3—8 万人への平等な分配——独断的不平等論の打破——

だから、社会主義が万人の平等な分配と主張するのは、もちろん権力濫用の源泉である経済的な著しい格差をなくさせることにあるのだが、もう一つとしては個性の発展によってそれが妨げられないようにすることにあると考えられる。もし物質的報酬に人為的な等級が存在するならば、そうして等級がつけられるならば、個人は個性そのものの発展によって得られる名誉と地位の道を取らず、まず名誉と地位に早く到達する物質的報酬が多い

²⁶ 今で言う「児童買春」のことであろう。

職を選ぶようになり、個性の発展は二次的なものになってしまうであろう。これは個性、個々の傾向を曲げ、発展を阻害するようになるものであって、今日の社会主義が従来の労働に比例した報酬の等級をつけるという提案を排斥した理由である。社会主義を非難する者は、ここに至り不平等論をわめき立てる。

田島博士は『最近経済論』において次のように言う。

「人は元来不平等である。そして社会のあらゆる事情はますます人を不平等にしている。このため、経済上の絶対的平等を望むことは、あたかも顔が同じであることを望み、寿命が同じであることを望むようなものである。」

「人は元来不平等である。知力、徳の力、体力などが人々の間で同じでないことは、まさしく顔つきよりも開きのあるものである。このため、人が社会を組織するにあたっては、各人が決して平等の関係を維持することができず、賢者は必ず愚者を率いる。君子は必ず小人を使用し、強者は必ず弱者を制するであろう。これによって夫が言い出し、妻がそれに従うという夫婦の道ができ、君尊民卑の考え方ができ、自由民及び奴隷の区別ができ、富豪及び貧困の差別ができ上がる。このように見てみれば、社会の不平等というものは人の性質、自然の結果であるだけである。」

金井博士は『社会経済学』において次のように言う。

「一個人の私有財産を完全に廃止し、人々の享樂、欲望の満足を絶対的に平等なものにしようとするものである。」

社会主義の分配については、本編で後述しよう。しかしながら、明らかにしておかなければならないことは、分配の平等ということと経済上の絶対的平等ということは、決して同意義のものではない。病気によくかかる者は、公共の病院に治療を多く依頼する分不平等を作っている。多くの子供を持つ者は、社会の学校に教育を多く任せる分不平等を作っているのである。旅行家は鉄道を、学者は図書館を、美術家、音楽家は皆それぞれに美術館、音楽堂を多く使用することによって経済上の不平等を作っている。つまり、不平等である各人が各々不平等に公共財産を使用することによって受ける経済上の利益は、各々不平等を作っているのである。だから、個性の不平等に応じた正当な分配ということを要求するならば、社会主義はこの公共財産の大いなる拡張によって要求を満足させることができるであろう。——社会主義は個人の不平等を忘却しているものではない。平等な分配というのは、分配されるだけの私有財産が平等であるということにすぎないのであって、享樂、欲望の満足を絶対的に平等なものにしようとしていると偽りを述べる金井博士などは、学者としてまことに卑しむべき不真面目な態度である。分配の平等とは平等な購買力を分配されるということである。この平等な購買力を不平等な個人が不平等に使用することで買われる経済上の品物は決して絶対的に平等なものではない。絶対的に平等な享樂を与え、欲望の満足を絶対的に平等なものにしようとするものではないことは言うまでもない。同じ価格で購入する書籍とぶどう酒が経済上の品物として与える享樂は、平等なものではない。また同じ価格であるために、書籍とぶどう酒は全ての人に平等に欲しがられるもので

もない。金井博士はある厳粛な主義に対し、単に偽りの説を広めればそれで足りると考えているようである。ただ残念なのは、社会問題の専攻によって法学博士となり、大学教授となっている田島錦治氏が、人は元来不平等であるという一言から糸をつむぐように一切のことを演繹して、それで平然としていることである。もちろん、社会主義は個人としての不平等を認める。しかしそのせいで人類としての同胞を、個性に後ろに隠されて平等主義を主張することを憚るようなものではない。平等主義！ もちろん、社会主義は社会主義であって、社会の生存進化を最終目標とするが、その目的のために平等が保障された上に自由競争をできる社会組織を強く要求するから、明らかに自由・平等論を継承している。しかしながら、社会主義の自由・平等論は個人主義時代の革命思想のように、自由のための自由や平等のための平等を唱えるものではない。また、人は元来自由・平等であるから、不自由・不平等な社会を（個人主義の思想であるから契約によって）打破せよと主張するものでもない。なぜならば、元から自由で平等であるならば、不自由・不平等な社会を組織する道理がなく、自由のための自由、平等のための平等というのは、フェリーが政治的な自己満足²⁷であると言ったように、効果のないものだからである。しかしながら、社会主義の自由・平等論は田島博士のような「人は元来不平等である」との根拠なき臆説を許容するものではない。なぜならば、原人社会に対してなされた科学的推理では、原人社会は本能的社会性により、原始的平等によって平和な社会として存在していると言われているからである。——つまり、社会主義の平等論は、こうした好き勝手な臆説のように、元から平等だと言ったり、元から不平等だと言ったりはせず、社会の生存進化のために階級的な不平等を排し、平等が保障された上で自由な活動をさせよと要求するのである。だから、平等を説くにあたって、「身長、体格、強さ、性各、趣味などは不平等であるが、推理したり、談話をしたり、理性を有する動物であることによって他の動物と異なる点においては等しい。」というような生物学の許容しない非科学的論断をしない。それとともに個性の不平等を認識する時においても、「最も下等な人類と最も高等な人類の間にある優劣は、最も高等な動物と最も下等な人類の間にある差よりも大きい。」との言葉を科学的権威のようにあがめ、それで議論の基礎を築いたりはしない。なぜならば、推理したり、談話したり、理性を有することは単に人類に限ったものではなく、他の高等な動物においてもある程度存在するからである。それによって人類のみを特別に他の動物と隔絶した天空に置くことができないのは、生物進化論の原理であるとともに、近い種族を同じ分類に分けるといふ生物学の分類の原則によって、あたかも黒い犬を猫に分類したり、赤い犬をキツネに分類したり、大型の西洋犬を馬に分類したり、小さい日本犬を羊に分類しないのと同じである。高等な動物を人類に組み込むか、下等な人類を高等動物に分類するかしない

²⁷ フェリーというのは、エンリコ・フェリーのこと（フェリーは、十九世紀イタリアの刑法学者。いわゆる新派刑法学の提唱者で、ソビエト刑法に理論的影響を与えたと言われる）。当時、著書の『社会政策と近世科学』が翻訳されていた。

ちなみに、原文ではその後に「政治的手嬭」と記述されている。「嬭」は「淫」の誤りだと思うが、それにしても意味が判然としない。とりあえず、「政治的な自己満足」と訳した。

ならば、高等動物に近い野蛮人を人類と著しくかけ離れていると言うことはできないのである。つまり、社会主義の自由・平等論は、人に元から平等なものがあるから正義であるかのように主張しないし、人は元来から不平等であるとして自由・平等を非難するかのように考えたりもしない。正義とは、社会の生存進化に適合することを示す、外から包んだ言葉であって、その内容は地理によって、また時代によって異なる。社会の生存進化のためには、古代の奴隷制度は十分正義であったし、中世の君主万能論、貴族専制も決して非難されるべきものではなかったことは、何人も知っているようである。しかしながら、正義の内容は常に流転してとどまらない。古代奴隷制度の正義あるいは中世の君主、貴族の絶対専制的な正義によって、今日、今後の正義を律することができないことを知るならば、どうして田島博士のように、「人は元来不平等である」との凝り固まった独断によって正義の歴史的進化を無視するのであろうか。「人が社会を組織するにあたっては、各人が決して平等の関係を維持することができず、賢者は必ず愚者を率いる。君子は必ず小人を使用し、強者は必ず弱者を制するであろう。」という博士の前提は、必ずしも真でないとは言わない。けれど、この前提があるために、「これによって夫が言い出し、妻がそれに従うという夫婦の道ができ、君尊民卑の考え方ができ、自由民及び奴隷の区別ができ、富豪及び貧困の差別ができ上がる。このように見てみれば、社会の不平等というものは人の性質、自然の結果であるだけである。」という結論が出てくるが、これは明らかに社会の進化について無知な証拠である。もしこの前提があるために、必ずこの結論にしかならないと考えるならば、国家社会主義というものの主張は以下のようにならなければならない。——人は元来不平等である。そして社会の歴史は進化するものではなく、正義はずっと不変である。だから、今日の民法を改め、ローマ法²⁸以前の家長が持っていた絶対的権限を下で家族を物格とし、天皇と華族を所有物としての国土及び人民につき、生殺与奪の権利²⁹がある家長君主とし、戦争の捕虜と債務者は鉄鎖でつなぎ、奴隷としなければならない。そして著しい貧富の差は、人が元来不平等であるという人の性質、自然の結果であるから、資本と労働の調和とか、労働者保護とか、国家社会主義そのものとかいうものは、いずれも不平等論と相容れない空論であると。社会進化の跡を見よ。社会は進化に応じて正義を進化させる。川の流れは流れ行く方向に従って深くて広く、歴史の大河は原人集落に限られた本能的社会性の泉から、社会意識の発展という激しい勢いの流れとなって流れる。——これが人類の平等観である。家長権の制限、婦人の独立、奴隷の解放、そして国王と貴族を打倒したフランス革命の大滝。社会主義はこの大滝のうねりを受け、さらに非常に高い断崖から勢いよく落ちるために手を加えている社会意識の大潮流ではないか。このナイアガラの滝からオン

²⁸ ローマ法が十二表法を基礎にしていることについては、第二章の注17参照。ローマ法は、共和制期から帝政期にかけて最も発展し、その後は衰退していった。6世紀にはユスティニアヌス帝の下で『ローマ法大全』が編纂されたが、長らく忘れられており、中世になって教会の下でローマ法が見直され、以降ヨーロッパ大陸諸国に大きな影響を与えた。現在の日本民法も、ローマ法の原則を多くとどめている。

²⁹ 原文では「殺活贈与の権」となっているが、「贈与」というのはいかにも変である。著作集には指摘がないが、「与奪」の誤りと見なして訳語をあてた。

タリオ湖に落下して、社会意識が鏡のような湖の水面に勢いよく達し、人類の平等観が地球規模に発展した時——ここに社会主義の主張する社会の進化と、個人主義の理想とした平等が保障された上で行われる自由な活動が存在するのだ。もし六千年の歴史³⁰を有する我々が、この大潮流として浮びつつあるものを理解しないならば、祖先が猛獣と戦ったというような口承の伝説以外に歴史を持たない南太平洋の未開人の村落にも劣る（そうではない！ 東洋の未開人村落³¹においては、二千五百年にわたる平等観を発展させる基盤である大潮流を国体論で覆い隠し、未だ平等観は少しも発展していない。持っているものと言え、南太平洋のそれのように、口承の伝説を集めた『古事記』と『日本書紀』だけである。『いわゆる国体論の復古的革命主義』を見よ）。——だから、我々は自由・平等論をこのような意味において主張する。つまり、社会進化の理想を実現するために、かつて家長専制となり、君主専制となり、奴隷制度となったように、社会が進化して同類意識が著しく鋭敏となって、従来正義とされた不平等を排して平等を正義とし、平等に団結した者たちの自由な活動³²によって今後の社会を進化させようとするにあり。戦争による略奪の権利、占有による土地の私有制度が、社会がある程度進化するまでは適合して正義であったように、家長権も、貴族も、奴隷もまた社会がある程度進化するまでは十分に正義として社会の目的に適合したものである。だから、自由・平等論を歴史の流れに逆行させて不平等に非難を向ける³³というのが、誤った個人主義時代の独断論であることは言うまでもない。今日社会主義者のある者は今なお依然としてこうした議論を継承しているが、それはその者がそうした独断を持っているからであって、社会主義の真理はこのために隠されてはいけない。しかも、社会がある程度進化するまでに不平等が一度だけ正義であったことによって、今日、今後の社会の進化に抵抗することをよしとし、著しく鋭敏となった同胞意識が階級のひどい格差懸隔に耐えられなくなっても、なお平等論を抑圧しようとすることは、いっそう取るに足らないものであり、国家社会主義というものは一つの真理も持たない。正義をさかのぼらせて善し悪しを判断したり、弁護したりすることをよしとしてこだわってはいけない。元から平等であるとか、元から不平等であるとかいう議論は、どちらも根拠のない非科学的な論断である。なぜならば、元から不平等だと言うならば、人類一元論によって「元来は不平等ではなかった」と言われるだろうし、元から平等だと言うならば、全ての生物は元々単細胞生物が進化したものであるから、一切の動植物は平等であると論じることになり、結局平等即ち差別の哲学的問題に論陣を移す他なくなってしまうからである。我々は社会主義を主張する者である。社会進化の理想に適合する手段をとればよい。だから我々は元から平等であるとか不平等であるとは言わず、社会進化の理

³⁰ 何をもって「六千年の歴史」としているのか不明である。

³¹ 日本のことを卑下して述べたものである。

³² 原文では「平等の団結自由の活動」となっている。どういう意味か判然としない。一応、本文のような訳を施したが、これで原文の意をあてているかは不明である。後々、訳語を再考する必要があるだろう。

³³ 意味がはっきりしないが、「自由・平等論を唱える者が、その理屈で過去の歴史をながめ、奴隷制度などに非難の言葉を向けること」を個人主義の独断論としているのであろう。

想のためにこの不平等な社会を打破し、平等と自由によって新しい社会を組織しようと主張するものである。つまり、我々は人類そのものが元から自由・平等であったか、また著しくかけ離れた差異があったかを論争せず、社会進化の理想のために物質的保護を均一に与えなければならないと要求するものである。——社会主義の自由・平等論はこの真理であることを明確に理解せよ。田島博士及び全ての国家社会主義者が、社会主義の平等論を「人類そのものが同じで異なること」と誤解せず、物質的保護の平等のことであると知るならば、そして物質的保護の平等がある程度まで今日の法律上実現し、美人も、醜い女も、八十歳の高齢者も、三歳で死んでしまった幼児も、その命に対する危惧や脅迫から平等な物質的保護を受けるようにしようとするものであると理解するならば、「経済上の絶対的平等を望むことは、あたかも顔が同じであることを望み、寿命が同じであることを望むようなものである。」との非難は、実に吹き出したくなる見当違いであることがわかるだろう。社会主義は平等主義である。しかし個性の障害のない発展を図るため、物質的方向のみで実践する平等主義である（平等論については、さらに『社会主義の倫理的理想』、『生物進化論と社会哲学』を見よ）。

我々は、殊更に田島博士の賢明さを傷つける者ではない。社会主義が、貧弱で趣味もない下層的な平等の中に個人の人格を溶解してしまう衆愚主義³⁴だと理解されているために、またある時代の社会主義がこうしたものであったがために、独断的不平等論は今日の学者階級の勢力である田島博士の口からたまたま出たからである。かつて安部磯雄氏の『社会問題解釈法』に向かって一冊の本を著し、光荣ある論戦を求めた一記者などはこの種の勢力の中で溺れる者である。しかも、人間にいかにか知識、道徳、品性、文章などにおいて不平等が存在するかを記者自身がその議論によって証拠立てたため、不平等論は大変有力な論拠を加えたことがあったなどというのは、この例であると言える。

3—9 独断的不平等論という現状擁護の仮面

資本家社会主義者がこうした独断的不平等論をくどくど述べ立てるのは、この経済的貴族国を維持しようとするためである。いかに田島博士がその弁護のために『最近経済学』を汚しているかを左の一節に見よ。

「そもそも現在の労働者が、経営者のように企業上の危険を犯すことなく、常に定額の賃金を受け取ることができることは、まさしく彼らにとって利益のある方法であろう。フランスの経済学者エミール・シュヴァリエ氏³⁵が賃金制度を批評して、『ある種固有の組合であって、その組合の一部は業務から生じる危険の外側において、報酬と報酬を受ける時が予定されたものである』と言ったのは、まさに当然のことであると思う。我々はまたセル

³⁴ 北は、資本家階級を労働者階級の水準に押し下げようとするのではなく、労働者階級の水準を押し上げようとするのである。一般に——妥当か否かは別として——貴族主義と呼ばれる立場である。

³⁵ 原文では、「エミール・ヴァリエ」となっているが、「エミール・シュヴァリエ」（『最近経済論』明治三〇年版四六七頁）が正しい。フランスの経済学者であるが、詳細は不明。

ニュスキー氏³⁶が『賃金制度を改革することは文明の後退を望むものだ』と手ひどい言葉を投げかけたことに同意を表せざるを得ない。人間に経営者と労働者の区別ができたのはまさしく自然の勢いである。人は平等であると言う社会主義の学説は全く実際に適合しない。試しに考えてみるとよい。労働者が一致団結して企業家を排斥し、生産組合というものを組織するとしたら、その労働者の中に経営者としての才能に優れた者と劣った者がいる以上、才能がある者が主として経営業務に従事しなければ、どうやって世界の市場で競争して勝つことができるであろうか。たとえ彼らの説くように、一国の主権の力を借りてその国だけは企業家を駆逐し、国内の生産事業を全て労働者の生産組合によって行えるとしても、他国には機敏な企業家がお存在し、労働者を使用して経営に当たった時には、その国は必ず不振の地位に立たされるだろう。それは、あたかも微弱な共和国が強大な専制国にその軍事上、外交上遅れを取るのと同じ結果となるだけである。だから、私は社会主義者の説くように、生産組合を全ての産業に適用して、現在行われている賃金制度と企業家を社会から駆逐するという説には同意できないのである。私は、賃金制度の革命者ではなく、改革者であると自ら任じなければならない。」

もし以上の論説が、金井博士のように、むやみに反社会主義的な感情を広めることを任務として書かれたものであるとするならば、『最近経済論』は我々にとって哀れむべき愚かな題目となり、ここにも文字上の能力を疑われるべき帝国大学教授である法学博士を見出すことになるだろう。もちろん、田島博士は通訳的学者ではなく、特に我々のような「何々氏曰く」といった虎の威厳は最も快しとしない所であるから、エミール・シュヴァリエの言葉はおそらく単なる博引傍証³⁷にすぎなかったものと信じる。しかしながら、今日の賃金制度のことを反対に「ある種の組合である」と言っている点について、自己の責任において裏書人になるとは何という不謹慎な行為か。組合制度の生産は、ある程度までは社会主義の発現であって、社会主義的生産制度と呼ばれるものである。それなら、もしシュヴァリエの言うように、賃金制度が既にある種の生産組合であるならば、これは現代社会が既に社会主義の理想郷であると言っているようなものである。そうすると、世界の社会党はことごとく解散してしまっよく、社会党を処分する策を社会政策上の難問としている『最近経済論』も焼却してしまっよいのである。生産組合は組合員の発言権が必要で、生産に関しては共和国のような合議制が必要である。現在の制度では、経済的貴族が家臣らの画策を聞き、生産に関する一切の事を決定し、労働者は賃金が多いか少ないかの程度以外には一言の口を挟めない。こうしたものをどんな言語によって組合と称するのだろうか。一人の利害によって人の命を奪ったり、居住、営業の自由を剥奪したりできる国家は、決して共和国と命名されない。それと同じく、資本家の権利によって賃金奴隷を工場から追い出し、明日の生計の道を失わせる生産の専制君主国は、生産的共和国とは全く異なった今日通用している文字——すなわち資本家制度、賃金制度という名がある。何を苦しんで

³⁶ 同じくフランスの経済学者と思われるが、詳細は不明。

³⁷ 広範囲に多くの例を引き、証拠を示して説明すること。

経済学の根本思想から覆してしまうような文字の混同をするのか。統治権が国家の権利ではなく、君主及び諸侯の権利であり、しかもその君主及び諸侯が統治によって得られる利益の帰属する主体であった時代を共和国と命名しない³⁸ならば、生産が経済的家長君主らの統治権に属し、彼らの目的と利益のために労働者を物格として処分している今日を、どうして生産的共和国である生産組合になぞらえるというのか。社会主義の生産組織が大いに今日の生産組合と異なることは言うまでもないが、ある者は「政治的革命の道によらなくとも生産組合を経て、社会主義に到達することができる」³⁹とまで考えるほどであるとすれば、このような馬を指して鹿と言うようなことは学者として不謹慎の極みであると言わなければならない。生産組合は生産組合である。賃金制度は賃金制度である。シュヴァリエと田島博士は、人類の世界の言語を使用しない者である。

3—10 賃金制度と生産組合を混同するという法外な無知

しかしながら、こうした賃金制度をそれとは逆に生産組合と混同する者は、団結的生産の利益が資本家一人だけに帰属せず、労働者もその利益にあずかって高い賃金を得られるとの議論をしようとするためであると考えられる。もちろん、旧派経済学が仮説として考えているように、賃金基金⁴⁰というものが世に存在する道理はない。その基金に対する需要者（つまり労働者）の人口の増減によって賃金が常に一定の値から一定の値の間を上下するというのは、議論として貫徹しないものである。だから、その基金説の上に築かれたラッサールの「賃金鉄則」⁴¹が大いに修正されるべきであることは言うまでもない。つまり、企業家が労働者に賃金を払うのは、将来の生産物から配当されるはずの労働者の分を先払いするものであって、賃金は生産物から支払われるとの説明は、ある場合には事実であることをもちろん我々も否定しない所である。しかしながら、ある場合とは全てのことではなく、企業家はその生産物によって利益を得られない時には、労働者へ支払った賃金は決して生産物の中から出たものではないのだから、この説明も多くは仮説の域を出ない。我々はこうした枝葉についてあれこれと言い立てることはしない。問題は、賃金が支払われる所ではなく、賃金が契約によって決められる所にある。企業家が労働者と賃金について契約しようとするれば、生産物の利益によって支払えると思われる将来を期待して労働者の身を「需要」し、市場における労働者は空腹の圧迫と人口過多で身を「供給」しているので

³⁸ 原文は「統治権が国家の権利に非らずして君主及び諸侯が統治よりして得る利益の帰属する主体たりし時代を共和国と命名せざる」となっている。言葉が不足しているため、文字通り訳しただけだと意味が通じない。そのため、言葉を大幅に補って訳した。

³⁹ ベルンシュタインのような漸進的な社会民主主義の考え方のことであろうか。

⁴⁰ イギリス古典学派のJ・S・ミルの唱える学説に基づくもの。賃金基金説では、賃金に割り当てられる額を基金と見なし、受取総額は固定されていると考える。そのため、賃上げをするには労働者の数を制限する必要があると主張する。

⁴¹ 「賃金鉄則」とは、ラッサールが述べた考え方で、賃金は労働者の生存の維持、繁殖に必要な程度しか得られないとする考え方である。もっとも、ずっと手前では、労働者が増えれば賃金の市場価格は下落するなど論じており、ラッサールの「賃金鉄則」に従うかのような論述をしている。果たして、「賃金鉄則」を修正すべきとする主張がこれと相容れるのか、若干の疑いはある。

ある。——つまり、労働者は労働を売るという名の下に（あたかも人身そのものを売る売春婦が「色情」だけを売ると言うように）、肉体を需要と供給の法則の上に置き、人身売買を行っているのである。そしてひとたび買われ、契約の鉄鎖につながれた奴隷は、その生産物の利益について何らの要求もできない。支払われる賃金がたとえ企業家が既に持っている資本の中から出ようとも、また企業者が将来の生産物から得られることを期待して先払いをしたものであるとしても、またその期待を誤って資金に困り、他の資本家の金庫から出るに至ったとしても、それは神といえども理解できるものではない。奴隷の価格は既に市場において決定されたからである。新派経済学者は、企業家が生産物の中から賃金を支払うことを期待して、それに誤りがないものであるかのように勝手な判断を下し、「賃金制度はある種固有の生産組合であって、労働者が生産物に対して分配を予め受けられる便利な制度である」と言うが、それは何という空論であることか。そんなことはない！自らを科学的であると言ったり、経験的であるなどと言ったりしている新派経済学は、この点において旧派のそれよりもいかにひどい空論にふけていることか。「その組合員⁴²の一部は業務から生じる危険の外側において、報酬と報酬を受ける時が予定されたものである」。「経営者のように企業上の危険を犯すことなく、常に定額の賃金を受け取ることができることは、まさしく彼らにとって利益のある方法である」。それならば失業者が出るのは、企業の危険を負担せず、予定された定額の賃金を受け取っていたがためである！

3—11 社会主義は運営の才能を無用とするという誤解

田島博士の経済的貴族国の弁護論は、先に言った独断的な見解である不平等論にある。つまり、企業家と労働者の区別が生じたのは、不平等な人の本性、自然の結果であって、たとえ労働者の生産組合によって経営をしても、経営の才能がある者は企業的業務に服し、他は肉体的業務に従事するに至るから、平等な労働組織は不可能であり、企業家は不滅であるという議論のことである。しかしながら、これは言い換えると文字の能力を疑われるべき箇所である。社会主義は今日の企業家を排するといっても、企業的才能がある者を独断的平等論によって無視するものではないからである。優れた国家社会主義者であるイリー博士のように、企業家を工業における船長であるとして重要視することは絶対に否定しないが、彼のように工業の船長が同時に工業の船主でなければならないとする理由を認めないものである。法理的に言えば、自己の目的のために、自己の利益に帰属する権利の主体として企業を運営する今日の企業家を排すると言っても、国家の目的のために、国家の帰属する利益のために、国家の機関として企業を運営する才能のある者を無用であると言うわけではない。繰り返して言えば、工業の船主となり、かつ利益の主体となる企業家は国家であって、全国民は国家の機関として国家の利益のために、ある者は筋肉を用いる労働者となり、ある者は才能を働かす労働者となると言えるだろう。さらに繰り返して言え

⁴² 以前に引用された箇所では、「組合」となっているが、ここでは「組合員」となっている。文脈からして、こちらのほうが意味もわかりやすい。とりあえずそのままにしてあるが、北は引用に際して脱落させた可能性が高い。

ば、過去の貴族国時代における家長君主らのように、自己の目的のために、自己の利益に帰属する権利の主体として存在させている今日の経済的貴族国を打破し、あたかも今日の中央、地方の官僚が国家の目的のために、国家に帰属する利益のために国家機関として存在するように、経營業務に服する機関をその才能がある者に行わせることにある。つまり、博士の言うように、労働者の生産組合の中で経営の才能のある者が経營業務に従事しても、その経営者はいわゆる企業家と全く異なる組合の機関であって、ある種類の労働者であるにすぎない。統治権を行使する才能のある者が、直ちに統治権の主体となる諸侯君主でなければならぬという理由がないのと同じで、経営の才能のある者が必ず利益の主体となる企業家でなければならぬという道理はない。この点において、博士もまた金井博士のように、私田島錦治という者は経済学者であるのか、それとも経済学であるのかと顧みる必要がある。独断的不平等論に脳の中樞を腐蝕された者は、これほどまで賢明さを覆い隠されてしまうのか。

3—12 インターナショナルの運動を無視する田島博士の独断

田島博士による経済的貴族国の弁護論は余すところがないものである。氏は気ままに専制権力の利益を並べて憚らない。彼は言う。「国内の生産事業を全て労働者の生産組合によって行えるとしても、他国には機敏な企業がなお存在し、労働者を使用して経営に当たった時には、その国は必ず不振の地位に立たされるだろう。それは、あたかも微弱な共和国が強大な専制国にその軍事上、外交上遅れを取るのと同じ結果となるだけである。」と。これは事実である。故に、一国内における生産組合が、労働者の適度な労働時間と高尚な生活のために、他の安い賃金奴隷を酷使して安価な生産費に抑える資本家組織の産業と市場の競争に耐えられないことは事実である。このため、社会主義は一部分での生産組合の方法を排して政権の上に現われ、国家が全ての産業を自己の下に吸収しようとするのと同様に、外国において資本家産業が存在することは社会主義の実現された国家の産業に妨害となるだろうから、社会主義のインターナショナル⁴³の運動があるのだ。こうしたことは、社会問題を専攻する博士が注意しなくてよいものであるはずはなく、あの矢野文雄氏⁴⁴の『新社会』が、この点に殊更注意を払って書かれているために、中途半端なものになっていることは何人も知る所であろう。そしてそれが中途半端であるにせよ、「一国内における社会主義の実現がある程度までは必ずしも不可能ではなく、国家内での資本と労働の団結によって、経済的先進国に対抗することができるだろう」という矢野氏の議論は、博士の根拠のない推理を打ち消して余りあるものである。なぜならば小資本の分立した競争よりも大資本の合同した活動のほうがはるかに有力であって、相殺する破壊的な労働よりも団

43 原文では「万国国際大同盟」となっている。

44 『新社会』という著作名が挙げられているので、矢野竜溪のことだろうと思う。矢野竜溪は『経国美談』で名高い小説家であり、政治家である。立憲改進黨の結成に参加し、民権論を主張した。後には大坂毎日新聞社の社長に就任している。

結によって秩序立った労働のほうが大いなる生産をもたらすことは経済学の原理だからである。これによって国際競争に行えば、あの幕末に名付けられた各藩諸侯の分立が外国に破られた⁴⁵にもかかわらず、団結した一公民国家となつてからは強大なロシアにすら打ち勝つた時のようになるだろう。ただ、見過ごしてはいけないことは、「強大な専制国家」という言葉で現在の生産的専制国家を讃美する博士の根本思想にある。

3—13 国が得るはずの利益を資本家が奪っている現在の矛盾

もし専制国家という語が、国家の目的と利益のために、国家の統治権を専制的に行使する国家機関による政体であるとの意味ならば、専制に伴う機敏さと秘密主義が戦闘あるいは外交の極めて激しい競争において国家に利益をもたらすことは疑いのない事実である。しかしながら、君主が統治権の主体として君主の目的と利益のために、国家を客体である物格として取り扱っていた家長国時代を指して専制国家と言うならば、その専制権力の行使によって利益を得る者は君主であつて国家ではないことは言うまでもない（『いわゆる国体論の復古的革命主義』において国家を人格と物格に分類した所を見よ）。だから、もし田島博士のいわゆる強大な専制国家である今の資本家制度において、資本家はその生産団体の機関として団体の利益のため、団体の目的のために生産権を行使するならば、たとえそれが専制であるとしても、専制によって得られる利益があれば、その生産にあずかる団体に当然の権利としてその利益を享受させるべきである。しかしながら、これは決して現在の状態ではない。資本家はその生産権をあたかも家長君主のように、自己の統治権として自己の目的と利益のために振るい、年俸・月給の賃金によって家臣、召使いとなっている団員は、資本家の目的の下に客体として存在するにすぎない。故に、このような意味での強大な専制国家においては、強大な国家、生産団体を持つことは君主と資本家の利益になることであつて、強大な国家あるいは生産団体を率いて君主と資本家をさらに強大にすることは権利の主体である彼らに帰属する利益であり、その利益が偶然他者にこぼれ落ちるか否か問題外なのである。だから、イギリスにおいて一八九五年の統計によると、百三十五億円⁴⁶の収入のうち、八十五億円までが全人口の八分の一しかいない経済的君主らに帰属しているが、これは強大な専制国家における専制君主の権利とされているのである。その君主の目的と利益のために⁴⁷物格として存在する他の八分の七が飢餓の境を上下しているイギリスは、強大な国家ではない。残酷な悪ふざけをする統計家は、アメリカのシカゴ市の富をその都市の全人口で平均すると、一人あたり一万円の収入となり、一家では五、六万円の割合であるなどと計算している。しかし、失業者と犯罪者で充満しているアメリ

45 列強の圧力に抗せず、やむなく開国したことを指しているのであろう。

46 原文では、「百三十五億万円」となっている。億万=兆と見ると、当時一三五兆円だったということになり、現在よりもはるかに高い水準になってしまう。当時は億にも「万」を修飾語のようにつけていたのである。よって、「一三五億円」のことと読む。以下でも同じ。

47 原文では「君主の目的の利益とのために」となっているが、これまでに「目的の利益とのために」という表現は出てきたことがない。全て「目的と利益とのために」となっている。そのため、この表現はおかしい。指摘がないので、著作集の作成段階で誤りが生じたものと思われる。

力は貧弱な国家であって、強大な者は数十の経済的専制君主のことである。岩崎黄金皇帝がその屋敷の高い屋根に上って、「朕は豊かであるぞ。民はどうして豊かでないのか。」と仰せになろうとも、強大な者は岩崎という者のことであって、賃金奴隷や農奴によって組織された大日本帝国は決して強大な国家ではない。日清戦争に勝ち、日露戦争に勝って、利益線⁴⁸を拡張させ、貿易圏を拡大したことが、無数に存在する経済的家長君主をさらに強大にしようとも、それによって国民と国家が強大であるか否かは全く問題を異にしている。十六の軍団を持つ陸軍と数十万トンの戦艦を持つ海軍で武装した巨人ががい骨のように飢え、貧民に対して小さな盗みを働き、富豪の前にひざまずいて租税の恵みをもらうことを哀泣している醜態を見よ。大日本帝国は今や利益の帰属する権利の主体である人格を剥奪され、経済的家長君主らのために客体として存在するにすぎなくなっている。経済的専制君主らは強大であろう。しかしながら、大日本帝国はこれでも強大な国家か。

3—14 社会主義が官僚専制になるという誤り——社会主義の官僚は装いを新たに する——

おそらく田島博士はこのような意味において「強大な専制国家」という語を用いたわけではないだろうし、単に社会主義の生産組織を指して「微弱な共和国」と名付けたことに対照させるために用いたのだろう。ああ微弱な共和国よ！ どうして共和国は微弱であろうと決まっているのか。しかしながら、微弱という言葉は、社会主義にとって死活問題である。氏に限らず、「社会主義の実現は生産を減退させる」という全く転倒した偽りは堂々たる学者から常に聞くものである。それは金井博士の『社会経済学』にもある。

「もし強いてこれを実行しようとするれば、生産を監督し、全ての生産に従事するものの⁴⁹子孫の教育・扶養のみならず、一般に消費も監督させるために非常に多数の官僚を必要とすることを免れられないのである。しかし何と言っても、これよりもさらにおそるべきことは、指揮監督の任に当たる上級官僚が無限の権力を持ち、絶えずその権力を実行できる地位に立つようになることである。こうして社会は古来からも類を見ない圧制に苦しむようになるのみならず、際限のない干渉と監督が行われるにもかかわらず、生産の結果は決して今の制度下においてよりも多くはないだろう。いや、むしろ少なくなるだろう。なぜならば、既に経験によって知っているように、今現在の社会にも利己心の活動が全くないか、あるいは少ない所では生産がとても少ないか、悪いかのどちらかであるということが、一般に事実だからである。」と。

⁴⁸ 「利益線」とは、自国の勢力圏のこと。日清戦争が始まるまでは朝鮮半島のことを指していた。日露戦争後は、これが広くなり、満州も含むようになったのであろう。

⁴⁹ 前後は「若し強ひて之を実行せんとせば生産を監督し凡ての生産に従事するものは子孫の教育養生のみならず、又一般に消費をも監督せしめんがために非常に多数の官吏を要することは免かるべからざるなり。」となっている。「凡ての生産に従事するものは子孫の教育養生のみならず」という表現が主語、述語でねじれを起こしており、意味がわからない。「凡ての生産に従事するものの子孫の教育養生のみならず」とすれば意味が通じるので、そのように見なして訳した。

これは、社会主義に対してディレンマ⁵⁰を突きつけるものであろう。社会全員の貧困か国家万能主義かという両刀は、社会全体の富裕と同時に個人の自由・独立を主張する社会主義に逃げ道をなくそうとするものである。しかしながら、その刀はどちらも大地を叩いているにすぎない。——社会主義は社会全体が驚くほど豊かになることと個人の独立の両方を得られることを確信するものである。我々は、決して尊敬すべき金井博士を通訳的な学者であると信じるものではない。しかし、社会主義を官僚専制の国家万能主義と誤解して、強烈に個人の権威を主張するものはいわゆる個人主義である（個人主義の大いなる意義については、後の『生物進化論と社会哲学』を見よ）。しかしながら、誤解されるような偏局的社会主義⁵¹は、プラトン以前という遠い千年前のことであって、それがいかに官僚の干渉を許したかは、女性の貞操までも監督させていた事実からもわかる。現在の科学的社会主義は、決してこうした素朴な本能的社会性によって無意識につながれた古代の復古主義ではない。十九世紀に至るまでの個人主義の清らかな覚醒を受け、社会性と個人の確実な自覚の上に新しく築かれた全く別個の理想である。この精神はさらに『生物進化論と社会哲学』において説く。そして「官僚の監督がなければ生産的活動は萎縮する」という議論が人の本性に対する無意識の独断に基づいていることは先に説いた。しかしながら、社会主義の世と言っても、決してわずかな監督者が全て無用であるとは言わない。ただ、その監督者が、今日の官僚と全く別種の者であることを忘れなければそれでよい。今日の官僚の重要な任務は、権力階級の維持のために常に反抗しようとする弱小階級を抑圧することであり、経済的誘惑によって腐敗しやすい組織の下に置かれ、階級組織のせいでも専制のおごりと奴隸的な卑屈さを持っている。このような者が社会主義の実現された時になお存在すると考えるのは、日が昇ってもキツネが隠れないと言うのと同じである。今日のように上司の前には土下座の芸術家であるにすぎない者が、ひとたび社会に目を転じると、帝王のような権力を振るうのは、社会がこの著しい経済格差と権力的階級組織による暗黒に包まれているからである。監督者を推挙するにあたっては、決して今日の官僚のように、妻の縁故、形式だけの試験、月謝⁵²の納付したことの履歴書、政党が騒ぎ立てて励む猟官などの方法によらず、選挙によって立つ。そしてその選挙と言うのも、軍人の中から選出された晩年のローマ皇帝のようなものではなく、労働の義務を終えた外部の者から労働軍中の適当な者を選挙するというベラミーの提案のようであるなら、どこに専制があろうか。そして今日の裁判官の職が人格ある人物の名誉職となり、権力の濫用を監視して個人の自由・独立を保護するために構え、かつ労働的兵卒も監督者も、また今日の企業家に相当する重大な機関も同じ分配を受け、経済的に対等の地位に立つとすれば、その間どうして専制的な振る舞いと卑屈さを持った官僚層が出てこようか。このために、古代からの偏局的社会

50 原文では「両刀論法」となっている。これはディレンマの訳語として用いられたものらしいので、我々になじみのある「ディレンマ」に変えた。

51 「偏局的」というのは一般的ではないが、「偏った」という意味に解釈すればよいであろう。

52 「月謝」というのは、役職を得るための賄賂のことを指しているのだろうか。

主義、すなわち国家万能主義を個人主義の革命によって完全に打倒してフランスのようになることができないドイツにおいては、民主主義という名の下に個人の権威が社会の利益のために強大に主張され、中世の遺物を載せて流れてきた国家万能主義という流氷を国境の外に駆逐しようとして「社会民主主義」というものが主張されている。社会主義とともに民主主義が主張されているのは、個人の権威が社会という名において他の個人の意志に汚されてはいけないとの要求であって、どうして今日のような官僚に生産を司らせることができるかというものである。——そうではないのだ！ 今日国家万能の官僚専制で生産を司らせ、または生産に干渉させようとする者こそ、金井博士らのいわゆる国家社会主義ではないのか。金井博士の用いるディレンマの片方の刀⁵³は、むしろ深く国家社会主義自身の心臓を貫いているにすぎないのだ！

これにより、問題は金井博士のいわゆる生産を減退させるという主張や、田島博士のいわゆる微弱な共和国というものに帰する。これは誠に転倒した偽りごとである。社会主義は生産を減退させるものではなく、生産を増進するためのものである。微弱な共和国ではなく、強大な産業的共和国を出現させるものである。我々は、こうした全く転倒した誤解を、敢えて二氏のみならず十分に尊敬されるに値する人々が頑強に維持しているのを見るたびに、誤解する者がどういう理由でこうして非難を發するのかを考えた。けれど我々は今までに打破してきた不見識あるいは無思慮以外に、こうした非難が發せられる理由を見出せなかった。もしあるとするならば、空想的社会主義及び今日の社会主義者のある者が分配の不公平を論議することに力を注いでいるのを見て、生産の多少を顧みないために平等な清貧に至るだろうと考えることにあるのだろうか。

3-15 科学的社会主義が重きを置くもの

しかしながら我々は断言する。科学的社会主義は、決して分配論に重きを置くものではない。これは奇怪に思われるだろうが、我々が特に主張しようと思っている所である。空想的社会主義の時代には、独断的平等論という規則で上層の階級をただ下層に引き下げればよいと考えたことなどもある。また社会主義の發見に導いた動機が、現代社会の分配の不道理、不公平にあることにより、分配論が主張の要点であるかのように思われるのは社会主義者自身といえども免れない所である。しかしながら、社会主義の真理は分配論ではなく、実は生産論にあるのだ。つまり、土地及び生産機関の公有化とその公共的経営という主張が社会主義の中核となるのである。事実を見ても、世界の社会党は無数に異なった分配論によって一度も離散したことはなく、生産論を中心として合同して動かないのである。もちろん、分配という言葉は私有財産的な臭いのするものである。分配される配当額が私有財産として全く各個人の権利の内に属するものであれば、この言葉をそのように不当であると言わないことは当然である。しかし、一切を現代社会の標準的なものによっ

⁵³ 官僚専制を生むという批判のこと。

て推論する以外に術を知らない彼らにとっては、分配という言葉から直ちに、大いに拡張された公共財産があることを想像せず、私有財産制度の非社会的観察によって受け取られる。現在あるわずかな公共的財産は私有財産制度の砂漠の中にあるオアシスにすぎないとして、図書館に鉄網があったり、公園に鉄柵があることをやむを得ないと考える非社会的思想以外に何も持たない今日の人でも、決して軍艦に対して分配を主張したり、兵營の建物に向かって分配を要求したりしないではないか。これは、軍事上のことをかつての大名のようには考えず、国家の経営すべきものであることを理解しているからである。だからこれと同様に、生産上のことも決して一私人にまかせるべきではないということが明瞭に理解されるようになれば、兵營よりも大きな工場、軍艦をも建造する大造船所などを今日のように私有財産制度の分配の基準で眺めるといふ不合理は存在しなくなるであろう。それならば、社会財産の大部分は共有財産として存在すべきであり、分配される部分などは日常生活と社会の進化に応じ、個性の傾向を満たすための購買力となり、決して現在用いられる分配——名誉、権力、生活、恋愛の全てを含む意味での分配でないことは明白であろう。故に、社会主義者の分配に対する提案は種々に異なる。サン・シモン⁵⁴などは「労働力に比例して分配に等級をつける」と言い、ルイ・ブラン⁵⁵などは最上の理想を掲げ、「能力に応じて生産し、必要に応じて消費する」と言い、今日の社会主義者は「万人平等の分配」と言う。もちろん、「能力に応じて生産し、必要に応じて消費する」とのブランの理想は、我々の理想であって、遠くない将来に達することができるものである。しかしながら、こうした理想的な共産社会は生産がよりいっそう多くなり、道徳的進化がさらに一段と高くならなければ、実現され得ないものである。だから、科学的社会主義は現在の程度に応じた「万人平等の分配」をするにとどまり、次の進化を待つものである。もちろん、現在の日本において直ちに社会主義が実現される仮定すれば、『新社会』で言われているように、シモンの提案を当分の間採用することは、生産がそれほど発達していない国の状態としては可能だろうと言えるが、このようなことが実現することは決して今日に期待され得ないものである（『社会主義の啓蒙運動』を見よ）。のみならず、一個の生産物の上に、その生産に従事した人々の個人的労働の限界を定めることができない。また、歴史的に累積した知識の効果が、その中にどれほどの分量が含まれているのかを知ることができない。生産物というのは、渾然とした不可分の社会的、歴史的産物であるから、それを現在において個人別に分配の等級を設けようとするのは、社会規模での生産時代において個人規模での生産時代の分配法を継承するものであって、今日の正義とする所に著しく背くことになる。我々は、分配論に関する種々にわたる提案を時代に応じて進化するものと見るべきだと主張する見解をとる。分配は生産に伴う。社会という生物は、その生存進化の物質的資料である生産の多少に応じ、分配法の正義を異にする。あの生産が最も欠乏している食人族は、社会が生存するという目的のために、同胞の肉をさえも分配されるべき物質的資料

54 フランスの社会主義者。空想的社会主義の祖とされる。オーギュスト・コントの師としても名高い。

55 フランスの社会主義者。一八四八年の二月革命に参加し、労働委員会の委員長になった。

の中に加え、互いに殺し合う。それと同じように、今日までの私有財産制度は、戦争あるいは法律の形において他の階級の間で略奪物の分配をしている。原始的な平等に基づく村落共産制にあつては、原始的共産というべき原始的生産物の豊かさがあつて初めて行われる。将来に来るべき共産的分配は、無限にわたる発明による共産的生産の豊かさがあつて初めて行われるのであり、それに到達すべき段階⁵⁶である社会主義の万人平等の分配は、万人を平等な分配にあずからせ、経済上の欲望が衝突し合う必要ないほどの豊かさである大生産を徴兵的労働組織によってしなければならない。孟子は言った。「人間は水と火がなければ、一日も生きてはいけない。しかし、日暮れ時に他人の門口を叩いてこの大切な水や火種を下さいといえ、誰でも心よくくれるのは、それが有り余るほど豊富にあるからだ。それならば、聖人が天下を治めるには、必ず豆や穀物などの常食を水や火のように豊富にさせることを理想としているはずである。豆や穀物が水や火のように豊富になれば、人民も自然に礼節をわきまえて、どうして不仁な者など出てこようか。」⁵⁷と。これは、少ない人口に豊かな平原があつた堯、舜⁵⁸の時代の原始的村落共産制においては真であつたろう。私有財産制度に入って君主、貴族らの略奪階級が生じた、鋤で荒地を耕す⁵⁹素朴な農業的産業時代にこれを主張したことが空想にすぎなかつたのは言うまでもない（孟子の社会主義については、後に『社会主義の啓蒙運動』において説く）。しかしながら、今日再び人口よりもはるかに多い生産をできる機械が続々と発明されている。この機械で今日のように経済的貴族階級が独占状態を作り、破壊し合うような方法によって生産しないようになるならば、分配論などは生産の進化に伴つて自ら解釈されるのである。——故に、我々は社会が進化して万人平等の分配という、階級を越えて純粋な共産社会に至ることを円満な理想として持つ者である。今日の社会主義者が、孔子のように少ないことを憂慮せず、等しくないことを憂慮すると言つた過去の空想的社会主義を脱して、ことごとく土地、生産機関の国有化に全力を注いでいる者は、全てのものが大生産を挙げることによつてのみ解釈されるものであることを知っているからである。社会主義の実現した世界を微弱な共和国と言うようになるのは、今の社会主義を空想的時代の社会主義と同一視し、「新しいことを積極的にやろうとせず、清貧の平等に甘んじる」と解釈するからである。社会主義は、貧しい分配を平等にすることを主張せず、むしろ豊かな公共財産に対し、個性の相異に応じた共産的使用によつて満足できることを理想とするものである。上層階級を下層に引き下げる者ではなく、下層階級が上層に進化するものなのである。非難する者たちは偽りも甚だしい。

⁵⁶ 原文では「階級」となっているが、意味がわかりにくいので、「段階」にした。

⁵⁷ この著作では孟子の引用が度々出てくるが、その訳にあたっては、小林勝人訳注『孟子（上）』（岩波文庫・一九六九）と『孟子（下）』（岩波文庫・一九七二）を参照する（以下では『孟子（上）』などとのみ書く）が、読みやすいように訳文に変更を加えることをあらかじめ断つておく。ちなみにここは、『孟子』卷第十三尽心章句上の二十三章にある（『孟子（下）』三四七—三四八頁）。

⁵⁸ 堯、舜はともに中国の伝説上の帝王。理想の君主とされる。

⁵⁹ 原文では「萊犁」となっている。意味がよくわからないが、「草萊」で「荒地」という意味があるので、「萊」を荒地の意味と解する。

3—16 下層階級を上層に引き上げるにはどうすべきか

それならば、どうすれば社会全体に今日の上層階級のような幸福な生活を受けさせるほどの大生産ができるのだろうか。それに対してはこう答えよう。歴史的進行の流れに従っていただけだと。我々が先に経済的貴族国の歴史を、経済的土豪の時代から経済的戦国時代となり、さらに経済的封建制度に至ったと言ったように、経済史の潮流は今やまさに勢いよく流れ、トラストへと流れている。そして戦国時代の戦乱に苦しんだ者が封建制度の貴族政治を喜んだように、今の経済学者はことごとくトラストの大生産を讃美している者である。もちろん、これは当然のことであって、分立した資本が合同した資本よりも経済的であって、共同し合う労働よりも破壊し合う労働のほうが多くの生産を成し遂げるといふ愚かな話が存在する道理はなく、経済的封建制度は戦国時代の経済戦争がないことで彼ら諸侯とともに社会に利益をもたらし、大生産を挙げることができるのは疑いのない眼前の事実だからである。いかにアメリカの裁判官がトラストの禁圧に全力を注いだとしても、またいかに労働者と小資本家はその横暴におそれをなし、極力それを妨害することに努めているとしても、歴史の大潮流は木の柵や石の塊で阻むことはできない。全世界は今やほとんど全くトラストによって覆われようとしている。かつて北アメリカの石油業者が破壊的な競争をしたため、石油はむやみに倉庫に積まれ、大地を流れて顧みられなかったような大損失をこうむった者が、一八八二年にスタンダード石油トラストが組織されると、実に生産費の六割を減らし、近年の配当総額は六億円に近いと言うのではないか。四十億円の資本を合同して成立したカーネギー製鉄⁶⁰トラストが、他の合同がないヨーロッパの資本家をどれほど中国の市場から駆逐したかを見よ。グルコース⁶¹製糖会社は全米の同業者を残らず合同し、ナショナル・ビスケット会社は全国の大製造会社の九割を合同し、ロンドンにおいては八百屋すらトラスト組織となったと言うのではないか。社会主義は、トラストがいかに専横を働こうとも、歴史の進行に逆らって小資本が分立していた前世紀を回顧するものではない。トラストの進行を継承し、さらに大合同を進めようとするものである。トラストという資本家の大合同は、同業者間の破壊的な競争をやめるため、広告の莫大な浪費と各自の破壊的行為による資本の無駄遣いをなくすけれども、それは単に資本家間の大合同にすぎない。それどころか、他の労働者の大合同である労働組合と激しい戦闘を絶やさないため、いかに資本と労働の浪費があるかわからない——これが、トラストというものが今なお労働と資本の関係において不完全な合同であって、大きな浪費をして生産を阻害する所以である。トラストという資本家の大合同は、暗闇の中で飛んでいるにすぎない。経済的混戦をやめて需要と供給の関係を統計的に、全体を見下ろすように眺めるという利点があるので、従来のように十年ごとに大恐慌に見舞われるようなことはなくなった。け

⁶⁰ 原文では「鉄製」だが、本文では「製鉄」とした。カーネギーは鉄鋼業で成功したアメリカの実業家だからである。

⁶¹ 原文では「グルゴース」となっている。「製糖」という業種からして、「グルコース」のことだと思われるので、変更した。

れど、その経営が専制権力に伴う暗愚とおごりに基づくため、需給の関係を見る明かりが覆われしまい、諸侯らの厳しい取り立てがされるために、社会は購買力を枯渇させられてしばしば生産過多となり、社会はいかに資本と労力を消費しているかわからない——これが、トラストが今なお消費と生産の関係において不完全な合同であって、大きな消費をして生産を阻害している所以である。トラストという資本家の大合同は無数の小売人を必要とせず、同業者間の破壊のために必要とする人員、収益のない工場を閉鎖するよりも、労働者を解雇することによって労力の消費を避けることで大きな利益を得ているが、その節約された労力は直ちに生産の道に就くことができず、意味のない節約とならないのみならず、ある者は社会の慈善によって衣食をしのぎ、次の需要があるまで遊んで暮らし、ある者は社会を脅かして犯罪者となる。社会のこうむる労力の浪費がいかに多大であるかわからない——これが、トラストがやはり全ての関係において不完全な合同であって、大いに浪費を作りだし、生産を阻害する所以である。そして経済活動における二つの動機のうち、公共心は個人の契約関係のために圧迫されて働かず、利己心は著しい階級の格差による絶望によって刺激される所がない——これが、トラストは社会全体を一丸とする大合同ではなく、社会全体を豊かにする大生産をできない所以である。社会主義は、この資本と労力の大浪費をするトラストを社会の経営に移し、こうした浪費という欠陥を除去するものであると考えられるのである。経済的戦国時代は経済的封建制度に至り、経済的封建制度はさらに経済的公民国家に至る。社会主義は社会のためにする生産によって社会の購買力を枯渇させるような厳しい取り立てをせず、専制の暗愚から生じる生産過多もなく、無責任な労働者の解雇、工場の閉鎖から生じる失業者もなく、労働者と資本家の二大階級による闘争から生じる資本と労働の浪費もない。そして平等の分配によって、自由に行われる個性の発展によって達しようとする名誉と地位に対する利己心の盛んな活動が生まれ、社会に帰属する利益であることを意識して努力する公共心へ神聖な刺激がなされる。経済学者という者はトラストによる大生産のことを筆の先がすり切れ、舌が腐り落ちるほど賞賛しておきながら、トラストによる大生産を成し遂げる社会主義を誤解し、むしろ生産を減退させると言い、微弱な共和国であると言う。これは何ということか。彼らは、個人の利己心が社会の経済的源泉を左右させることをそのように賢明な制度であると思うならば、なぜ大倉某⁶²のような者に、砲兵工廠の工場主として、砲弾に砂を入れたり、銃の弾丸に石を混ぜさせたりしないのか。国家の生命の根源である生産権を、個人の財産権として存在させている今日の売官制度をそのように確定した経済組織であると思うならば、どうして統治権を皇帝の利益のために存在する財産権だとして官職を売買している中国や朝鮮のようにさせないのか。

3—17 小規模な資本家が残ることは、社会主義を阻止する理由となるか

⁶² 大倉喜八郎のこと。大倉喜八郎は幕末期に武器商人として成功し、維新後大倉組を起こした実業家。大倉財閥の基礎を固めた。

しかしながら、誤解してはいけない。トラストの経済的封建制度が一転して社会主義の経済的公民国家に至るということと、トラストの時代に小企業家と小資本家が存在する余地がないということは自ら別問題である。統計は明らかにトラストという大企業家の合同が、小企業家の同業者を併呑⁶³して圧倒していることを示すが、トラストの恵みによって立つ小企業家がそれに平行して発生し、また大規模では生産できない美術品修繕業などの手工業的な小企業家はトラストの勢力範囲の外で存在していることも示している。月給、年俸によって雇用された精神的労働者、賃金で暮らしを立てる肉体的労働者でも、トラストの株券を買い、ある面では小資本家となることができるからである。故に我々は、社会主義者の中で皮相的な見解を持つ者のように、トラストの勢力を見て小企業家の存在できる余地がないかのように速断して信じ、社会の著しい階級格差を、トラストの株券のことがとくが黄金貴族階級に独占されているものであるかのように速断して理解することが実に独断論であることを知るのである。しかしながら、こうした小企業家というような小さい略奪者が存在できるのは、あたかも封建時代に政治と刑罰が普及していないために、森林に山賊がいたり、街中に博徒⁶⁴がいたりしたように、黄金大名の目を避けてモグラのように存在できるからである。トラストの株主として小資本家となることができるということなどは、あたかも封建時代であっても、農奴だけではなく貴族階級に付き従い、略奪階級を組織していた武士もしくは足軽仲間の階級があったのと同じである。もし封建時代においても森林に山賊がいて、街中に博徒がいたという理由で、また貴族階級と農奴の階級だけでなく、その間に武士、足軽仲間というような略奪階級が介在したという理由で、人類の政治史が封建制度で終わりではないことを理解するならば、次のようなことが言えよう。あの講壇社会主義者という者は社会主義者の中の皮相的な見解を持つ者を困窮させるため、この経済的封建制度の下においても小企業家、小資本家の存在できる余地があったということを利用して、かえって自らが経済史の進行を忘れていたなどという失態に陥っているのだ。これは何ということか。金井博士と田島博士の著書においては、この点からの非難は見出されないが、自ら講壇的社会主義を主張すると称する者の多くは、殊にこの点に力を極め、純正社会主義の前に抵抗を試みる。京都帝国大学教授の法学博士桑田熊蔵氏⁶⁵、千山万水楼主人⁶⁶の名の下に読売新聞の紙上で流れるように美しい筆を振るって大いに議論した法学士河上肇氏、『社会問題解釈法』に対して論戦を求めたとある著者などはこの類である。社会主義は、小企業家というような小さな略奪者が今なお経済的諸侯の勢力の外に立って存在している現代に甘んじるものではなく、来るべき時代において小企業家をも存

63 原文では「併呑」となっているが、「併呑」の誤りであろう。

64 博徒は、賭け事をするもののこと。つまり、昔のヤクザのこと。原文では「博徒」となっているが、せめて「賭徒」と書くべきであろう。「博」とは死者の遺族に送るもののことだからである。山賊と贈り物をする人とを並列して書くはずがない。

65 明治期に活躍した法学者、社会学者。労働問題に取り組み、社会政策学会の結成に参加した他、農商務省による職工調査（のち『職工事情』にまとめられる。）に専門家として関与した。

66 「千山万水楼主人」というのは、河上肇のペンネーム。

在させつつ、略奪させてはいけないと主張するものである。精神的、肉体的労働者がトラストの株券を得て、ある面での小資本家という小さな略奪者として経済的貴族の下に隷属して存在している現代に甘んじない。来るべき時代において小資本家がなお存在しているということはそれだけの事実すぎず、経済的階級国家が歴史的な進行の流れの結果として経済的公民国家に至るといふこととは別の事実であり、別問題である。講壇社会主義者の議論は、経済史の進行した結果としての将来を見ることができておらず、経済的貴族国の維持を思想の基礎としている。純正社会主義は経済史の潮流に従い、経済的民主国を理想とする。そして今日の権利思想は、強大な力による所有権の主張ではない。個人規模の労働に対する個人規模の分配の正義でもない。社会が全ての富の生産者であって、全ての富の所有者であることは、今日の国家においても種々の法律において、国家が「最高の所有権者」であることを現している事実を見よ。このように国家が最高の所有者と承認されるまで権利思想が進化し、正義の理想が向上した今日において、なお小企業家、小資本家というような小さな略奪者が存在できることを理由として、経済的維新革命を阻害しようと試みるのはどうしてなのか。

これが、先に先決問題と言ったものである。つまり、こういうことである——進化論は誤謬であって、人類の歴史は経済的貴族国に止まり、地球が冷却するまで一度も変わることはないものか。

3—18 総括——純正社会主義は資本家社会主義とは似て非なるものである——

『社会経済学』と『最近経済論』が社会主義に関して広めている偽りは、決して以上にとどまらない。ただ、我々が以上の二氏を殊更指定して打破した理由は、肩書と地位、そしてその著書の名声がこうした思慮のない悪口に輝きを持たせていることを認め、特に彼らが半鳥半牛の鶴⁶⁷のように社会主義の仮面を盗んでかぶっているために、純粋な資本家経済学よりも世間を害することにおいてはるかにひどいものがあると信じたからである。そして以上の説明において、彼らがとやかく言っていることに少しも社会主義的傾向さえなく、「政府社会主義」あるいは「資本家社会主義」にすぎないことを明らかにし、それへの反駁をする際に、経済的方面における純正社会主義の本義をある程度示すことができたと思っている。——純正社会主義は鶴的社会主義が誤解するように、略奪階級の地位を転換しようとするものではない。階級を完全に一掃し、社会が社会の権利において社会の利益を図るものである。純正社会主義は、鶴的社会主義のように経済活動の動機を圧迫する現代社会を弁護するほど人の本性について無知なものではない。公共心の盛んな刺激とともに、利己心を障害なく発動させることで驚くべき経済活動を期待するものである。純正社会主義は、鶴的社会主義のように階級の隔絶を維持し、労働を軽蔑させるものではない。労働それ自身を外部的条件の上に置き、絶対的に神聖にするものである。純正社会主義は、

⁶⁷ 鶴は、古来の伝説にある化け物のことであるが、頭は猿、胴はタヌキ、尾は蛇、手足は虎で、トラツグミに似た声を発するとされる。だから、「半鳥半牛」というのは正確ではない。

鵠的社会主義のように独断的不平等論によって今日の階級的不平等を維持し、歴史の潮流に逆らおうとするものではない。同胞意識の鋭敏になった社会の進化に応じ、社会の進化のために個性の発展を阻害することのないようにし、物質的保護の平等を図るものである。純正社会主義は、鵠的社会主義のように一私人の目的のためになされる専制を讚美するものではない。また、国家万能主義によって今日の官僚を生産に関わらせようとするものではない。個人主義の覚醒を受け、わずかであり、かつ平等な監督者を賢明な選挙法によって社会の機関とするものである。純正社会主義は、鵠的社会主義が誤解するように、微弱な生産をして清貧の平等に甘んじるものではない。また分配論を重視するものではない。一切のことが大生産によってのみ実現されることを知り、トラストの進化をさらに進め、トラストに伴う全ての浪費を除去し、資本家間のみの合同をさらに社会全体の大合同にする。また、私人の権利である生産権を国家の目的と利益のためにする公権とし、個性の発展の競争と公共心という強烈な動機により、社会全体を驚くほど豊かにさせることにある。そして豊かさは、分別のない利己的行動による障害がなく、犯罪もなく、盲目的な企業もなく、階級闘争もなく、恐慌という破綻もない。経済的誘惑を除去した平等な出发点から始める競争の自由と知識の手抜かりのない広範な普及により、発明はさらに発明を生み、機械はさらに機械を作り、累積してやまない資本はまたさらにその累積してやまない資本を累積してやまない。今日の程度では想像することのできない速度で増加に増加を重ね、無限に、際限なく進む——まさに社会の権利と利益とを主張する純正社会主義は、この社会進化の理想を根本的な道理としている。むやみに政府と資本家のために国家の権利と講壇の神聖を汚し、鵠のように奇怪な鳴き声を出す彼らは、社会主義と名付けられるものを何も持っていないのである。鵠的社会主義にとっては、経済的貴族国は人類の歴史が終わる所であって、地球が冷却するまで続く制度である。純正社会主義は、進化論の上に立って厳粛な科学的基礎によって推理し、明確に社会進化の理想を意識して努力する。断じて美しい衣服に包まれた汚いものの塊と混同してはいけないのである。

しかしながら、社会主義の理想郷に到達するまで、資本家階級に対する階級闘争において一挙に勝利を収めることができないために、社会進化の跡が国家社会主義の道を経由する形を現すかどうかはおのずから別問題である（後の『社会主義の啓蒙運動』を見よ）。

（第一篇——社会主義の経済的正義　　終わり）